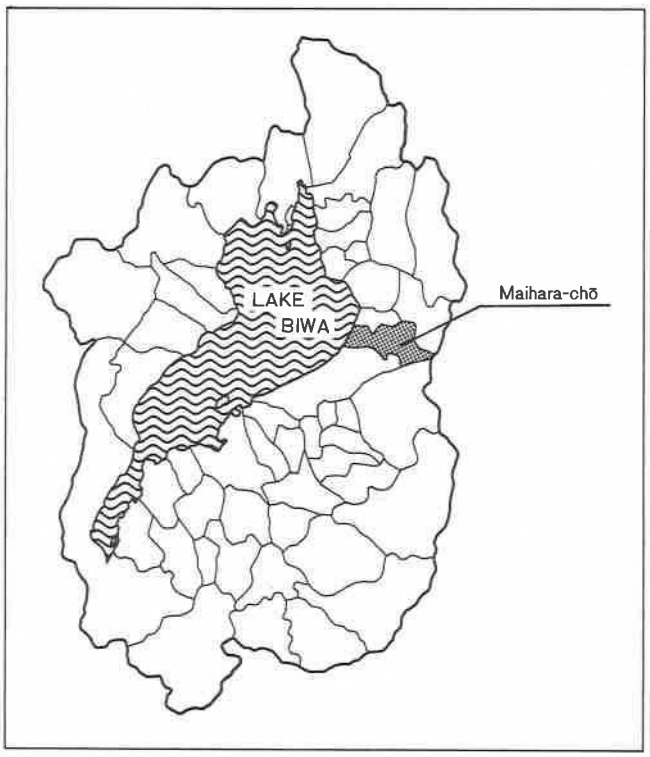
米 原 町 内
遺跡分布調査報告書



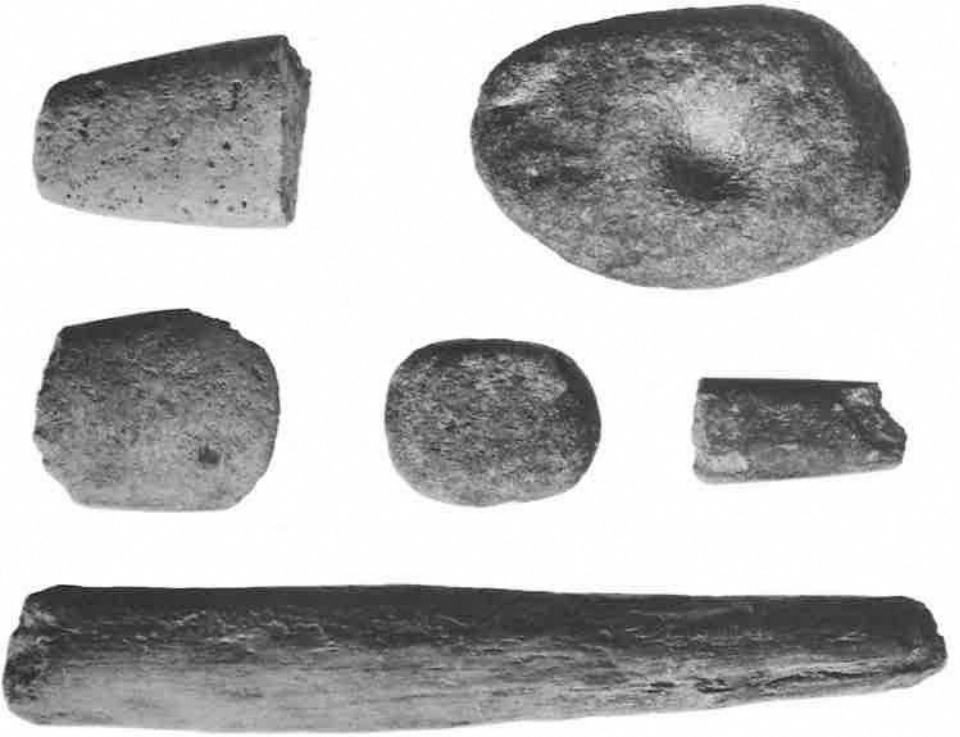
1988. 3

米原町教育委員会

石淵山古墳出土内行花文鏡

塚原第 2 号墳出土馬具

入江内湖遺跡出土鹿角器



入江内湖遺跡出土遺物

醒井古墓出土三耳壺

入江内湖遺跡出土銭貨

不動谷瓦窯跡出土軒平瓦

入江小学校前湖岸遺跡採集石槍

堂谷遺跡出土鴟尾

三大寺廃寺出土瓦類

序

米原町内には、滋賀県で最古の集落と考えられる縄文時代早期の磯山城遺跡や、弥生時代前期の遠賀川式土器を出土する立花遺跡など、著名な遺跡が存在しています。このような遺跡は私達の祖先が日本列島に生活の場を求めて以来、養い培ってきた文化遺産というべきものであります。この貴重な遺跡を失なわれないよう、また永く後世へ伝え残すことは現在の私達の使命とも言えます。

滋賀県では『滋賀県遺跡地図』を刊行しておりますが、それによりますと、本町内には54ケ所の遺跡が登載されています。しかし、その後町内にも開発の余波を受け、貴重な文化遺産が改変されたり、失なわれたことも事実です。逆に各種の開発行為により偶然に遺跡が発見される場合もあります。このような状況の下で、より詳細で正確な遺跡地図が必要となってまいりました。

そこで、昭和60年度より３ケ年にわたり、国庫・県費の補助を受けまして、町内に所在する遺跡の詳細分布調査を実施いたしました。本報告書は、その３年間の調査成果をまとめたものです。

本書は当町所在の埋蔵文化財の基本台帳となるものであり、これによって、各種開発工事の計画に際して、充分な埋蔵文化財の保護策が講じられることを希望するものです。また本書が多くの方々の目にふれ、埋蔵文化財に対する認識が高まり、学術研究ならびに郷土史研究に多少なりとも役立つことを願う次第であります。

末筆になりましたが、調査中および報告書作成にあたりまして、関係諸機関、関係諸氏のご指導、ご協力を賜りましたことをここにしるし、深く感謝する次第であります。

昭和63年３月20日

米原町教育委員会

教育長　福　田　定　観

例　　言

1．本書は、米原町教育委員会が実施した、米原町内遺跡詳細分布調査の報告書である。

2．本調査は、国庫補助事業として総事業費3,000,000円のうち、国庫補助金1,500,000円、県費補助金750,000円を受けて、昭和60年度より昭和62年度までの３ケ年間で実施した。

3．調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	米原町教育委員会	教育長		福田定観
調査事務局	〃	社会教育課	課長	酒井資夫（昭和60年度）
	〃		〃	後藤法泉（昭和61・62年度）
	〃		課長補佐	相宗又兵衛（昭和60・61年度）
	〃		〃	前川章太郎（昭和62年度）
	〃		主任	清水克章
	〃		〃	中嶌正寿
	〃		〃	藤原幸子
	〃		主事	池田　仁
調査担当者	〃		技師	中井　均

4．現地調査および整理作業には学生諸氏のほか多くの方々の協力を得た。調査参加者は文末に記した。

5．本書をまとめるにあたって、下記の諸機関ならびに諸氏には、未公開資料の調査、掲載および指導・助言等種々の協力を得た。ここに記して厚く謝意を表する。

滋賀県教育委員会、㈶滋賀県文化財保護協会、滋賀県立近江風土記の丘資料館、琵琶湖千拓資料館、磯崎文五郎・酒井源三・江竜喜之・河内美代子（米原町文化財専門委員）。

三辻利一、西田弘、江南洋、田中勝弘、兼廉保明、用田政晴、澤吉朗。

6．本書に使用した遺跡分布地図（付図）については米原町発行の１万分の１の地図を使用した。

7．参考文献については文末の文献目録で一括し、本文中には目録の番号で明記した。

8．本書の遺跡分布地図は、昭和63年３月の状況であり、今後遺跡の範囲は大きく異なってくる可能性もあり、開発等に当っては事前に米原町教育委員会社会教育課へ問い合せ、充分に協議されたい。

9．本書の執筆、編集は中井均がおこない、第Ⅴ章付論は三辻利一氏（奈良教育大学）、北村圭弘氏より玉稿を賜った。

本 文 目 次

Ⅰ. 調 査 の 経 過 …… 1
Ⅱ. 米 原 町 の 地 勢 …… 2
Ⅲ. 主要遺跡の概要 …… 3
1 入江内湖遺跡 …… 3
2 筑摩御厨跡遺跡 …… 5
3 磯 山 城 遺 跡 …… 6
4 堂 谷 遺 跡 …… 8
5 磯 崎 古 墳 群 …… 8
6 立 花 遺 跡 …… 11
7 薗 華 寺 遺 跡 …… 11
8 筑 摩 佃 遺 跡 …… 12
9 太 尾 山 城 跡 …… 13
10 不動谷瓦窯跡 …… 14
11 鎌 刃 城 跡 …… 15
12 石淵山古墳群 …… 16
13 三 大 寺 廃 寺 …… 18
14 塚 原 古 墳 群 …… 19
15 片 山 古 墳 群 …… 21
16 醒 井 古 墓 …… 21
17 醒井神籠石様列石 …… 21
18 下 丹 生 古 墳 …… 22
Ⅳ. その他の町内出土遺物 …… 23
Ⅴ. 付 論 三大寺廃寺出土瓦の胎土分析 …… 26
Ⅵ. 付 表 …… 37
付表1 米原町埋蔵文化財関係文献一覧表
付表2 米原町遺跡一覧表

付 図

米原町遺跡分布地図

挿　図　目　次

第１図　米原町の地勢図……2
第２図　入江内湖遺跡出土遺物（琵琶湖干拓資料館所蔵）実測図……3
第３図　入江内湖西野遺跡遺構図……4
第４図　筑摩御厨跡遺跡出土墨書土器実測図……6
第５図　磯山城遺跡出土高山寺式土器実測図……7
第６図　磯崎古墳群位置図……9
第７図　磯崎第２号墳周辺図……10
第８図　磯崎第２号墳石室実測図……10
第９図　筑摩佃遺跡出土縄文土器実測図……12
第10図　太尾山城跡概要図……13
第11図　不動谷瓦窯跡出土軒平瓦実測図……14
第12図　鎌刃城跡概要図……15
第13図　石淵山古墳群出土内行花文鏡実測図……16
第14図　石淵山古墳群出土土器実測図……17
第15図　三大寺廃寺検出基壇跡実測図……18
第16図　寺尾地区（醒井小学校校地）出土の本薬師寺式軒瓦実測図……19
第17図　塚原古墳群石室実測図……20
第18図　塚原第２号墳出土馬具実測図……20
第19図　片山古墳群石室平面図……21
第20図　醒井古墓出土灰釉三耳壺実測図……21
第21図　町内出土遺物実測図……23
第22図　町内出土遺物実測図……24

写　真　目　次

写真１　分布調査風景……1
写真２　磯山城遺跡屈葬人骨……7
写真３　堂谷遺跡出土平瓦……8
写真４　磯崎古墳群出土遺物（磯崎神社所蔵）……9
写真５　立花遺跡遺構検出状況……11
写真６　不動谷瓦窯跡発見状況……14
写真７　鎌刃城跡主郭土塁……15
写真８　鎌刃城跡堀切り……15
写真９　石淵山古墳群……17
写真10　醒井神籠石様列石……22
写真11　下丹生古墳……22

Ⅰ. 調 査 の 経 過

米原町では、ここ数年来各種の開発が進んでいる。たとえば、ほ場整備事業は枝折、上多良、中多良、朝妻筑摩で実施されており、湖岸部では、琵琶湖総合開発の関連事業が進められている。また今後においては国道８号線バイパス、町道（新設）等の建設も計画されている。

このように本町において各種開発行為は増加する一方であり、埋蔵文化財破壊の危機に直面している現状の中で、改めて遺跡の所在ならびに範囲の確認することが急務となった。そこで昭和60年度より３ケ年にわたり、町内遺跡の詳細分布調査を実施することとなった。この調査によって遺跡台帳を整備し、今後の土木工事等にそなえ、埋蔵文化財の保護をはかっていくうえで基礎資料となることを目的とした。

今回の分布調査は町内全域をその対象地域とし、小学校の学区ごとに各年次に踏査を実施した。すなわち、米原・入江学区を昭和60年度に、息郷・醒井学区を昭和61年度にそれぞれ踏査し、重要遺跡の測量、遺物実測、報告書作成を昭和62年度に実施した。

踏査の基本姿勢として、『滋賀県遺跡地図』等にもとづく周知の遺跡の位置再確認、現状の把握および新らしい遺跡の発見に努めた。しかし、実際に分布調査をおこなっていく過程で時間的制約等の問題が生じ、山間部は未踏査区域として残ることになった。このような区域については、後日機会をみて、補っていきたい。

踏査に際しては、2,500分の１地図を携帯し、随時遺跡の記入をおこなった。踏査期間は、稲刈りの終了と山林に入りやすい期間ということで、毎年１～２月に実施した。しかしこの時期は降雪に遭う日も多く、思うように踏査ははかどらなかった。

現地踏査後の整理にあたっては、表採土器の実測とともに、個人の所有物や過去に公表されていない遺物の所在地確認と遺物実測に集中してあたった。

写真１　分布調査風景

II. 米原町の地勢

滋賀県坂田郡米原町は、琵琶湖の北東岸、湖北地方の南部に位置している。北は天野川を隔てて近江町および山東町に接し、西は琵琶湖に面し、南は霊仙山から西方摺針峠に至る山々を隔てて彦根市および犬上郡多賀町に、東は霊仙山から北方阿弥陀ケ岳に至る山々を境として山東町、岐阜県養老郡に連らなっている。

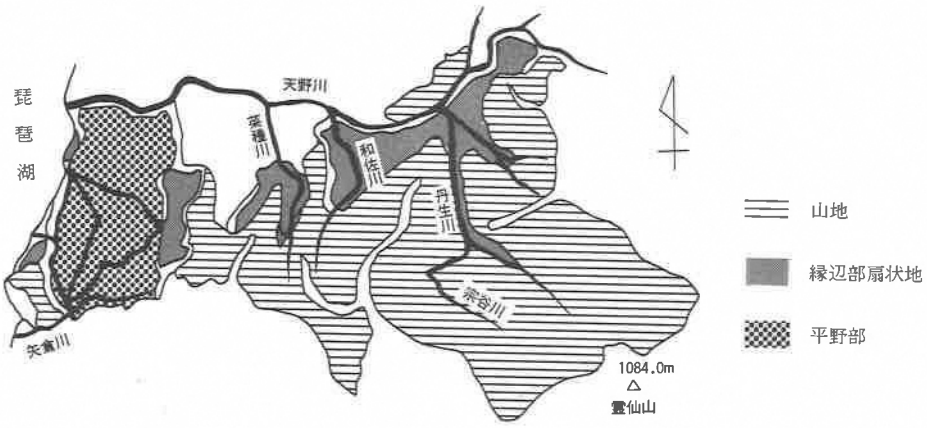
町域は、東西12.79㎞、南北7.37㎞、面積42.82㎢で、帯状に東西に延び、東南部は鈴鹿山系に連らなる霊仙山を主峰とする広大な林地を背景に、西は琵琶湖に面して平坦肥沃な穀倉地帯が展開している。

本町の地形は、東部は霊仙山（標高1,084m）を主とするカルスト山地で特有の地形を示し、その北側は岐阜県関ケ原から続く地溝帯の一部で、天野川がこれに沿って谷を開き、西部では湖岸にかなり広い平野が形成されている。全体的には、町南東部の山地部、天野川両岸部や和佐川下流部にみられる扇状地性低地部、琵琶湖に面する平野部のそれぞれ特色のある三地域に大きく区分することができる。

山地部は霊仙山をはじめとする鈴鹿山系に連らなり、このうち丹生川の上流部の起伏が最も大きく、霊仙山より発する宗谷川に醒井峡谷を形成している。また菜種川中流の山地部で、町域が最もくびれている。

扇状地性低地部は東海道本線や国道21号線などの重要な国土幹線が走っており、山東町長岡から西流する天野川に沿って狭長な田畑と集落が発達している。

琵琶湖に面した平野部は、干拓地と天野川の沖積地からなっている。



第１図　米原町の地勢図

III. 主要遺跡の概要

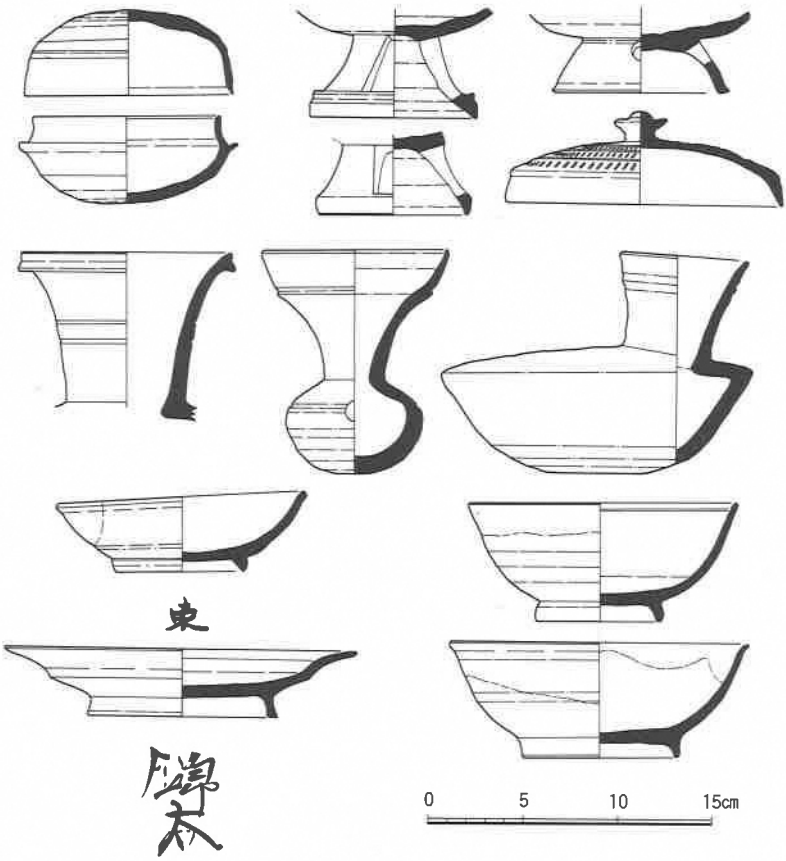
1　入江内湖遺跡　{遺跡番号　39 / 参考文献　7.8.9.12.27.32.34.37}

入江内湖は広さが300ヘクタール、周囲が８キロメートルにおよぶ、琵琶湖第２の大きさを誇る内湖であった。ところが昭和十九年より昭和二十四年にかけて、干拓事業が実施され現在のような水田に生まれ変わった。この干拓事業の際、地元の郷土史家磯崎文五郎氏(現米原町文化財専門委員）の地道で熱心な遺物採集によって、入江内湖全域が遺跡であることが判明した。採集遺物は縄文時代から平安時代に至るもので、以下に各時代の主要遺物の概略を記述する。

なお、干拓時に出土した遺物の大半は現在琵琶湖干拓資料館で保管、展示されている。

縄文時代　縄文時代の遺物としては早期に属すると考えられる尖底土器の他、石棒、凹石、磨石、石鏃が出土している。また骨角器の銛も縄文時代に属するものと考えられる。

弥生時代　土器に関しては弥生時代後期もしくは庄内式に属する甕、壺、高坏が少量認められるのみである。弥生時代の遺物で最も注目できるのは鹿角製の戈と考えられるものである。こ



第２図　入江内湖遺跡出土遺物(琵琶湖干拓資料館所蔵)実測図

れは鹿の又角を利用して刃部を作り出し、紐を結ぶための孔も基部に穿たれている。入江内湖遺跡からはこの鹿角戈が4点と、同じく鹿角製の又鍬と考えられるものも1点出土している。

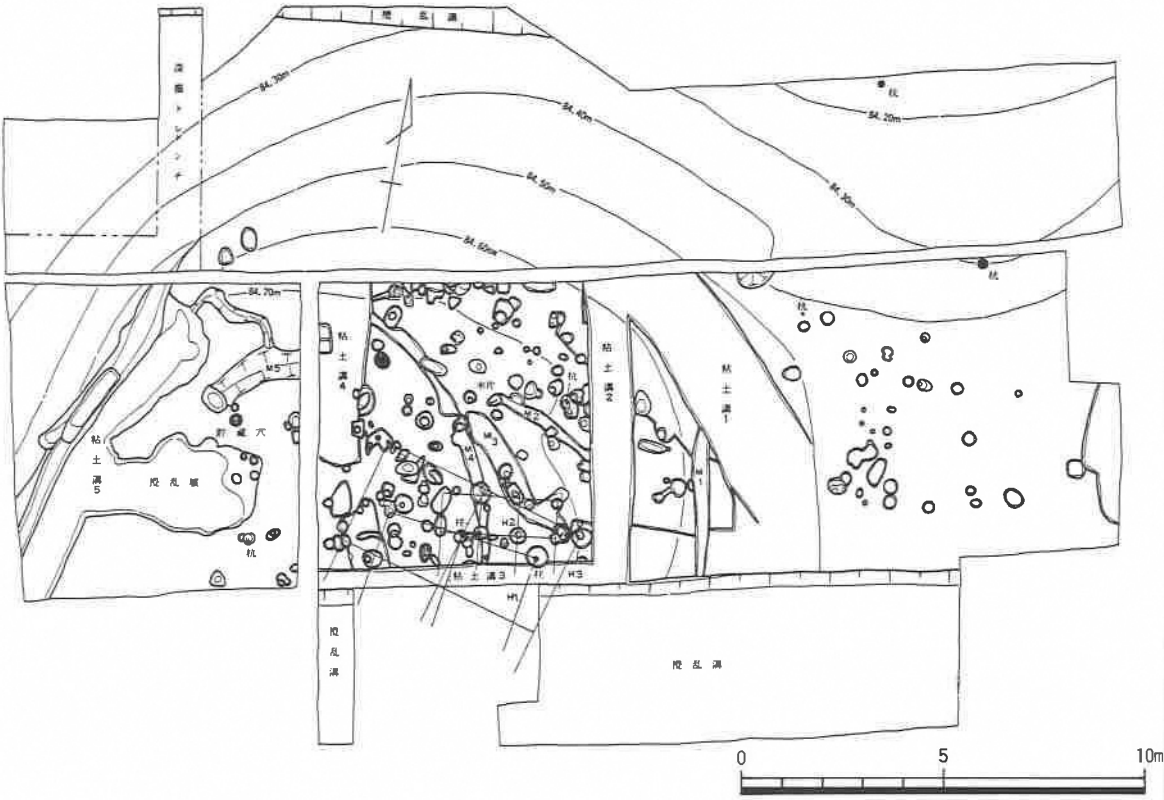
古墳時代　古墳時代の土器は若干の布留式土器が認められるが、大半は須恵器である。坏身、坏蓋中には古式の須恵器も含まれている他、韓国慶尚南道金海郡大東面禮安里39号墳や釜山市東萊区福泉洞10号墳出土のものに類似する伽倻系の蓋と長頸壺は注目される。

土器以外では勾玉、管玉、石釧、金環などの装飾品が出土しており、古墳の存在も考えられる。

歴史時代　土器類では奈良時代のものは少なく、平安時代後期の灰釉が多い。中には「錦谷」「東」などの墨書土器が含まれている。銭貨としては和同開珎、神功開宝が数点出土している。

しかし、平安時代後期以後の遺物は皆無となり、そこに内湖遺跡と内湖にとって大きな変化が生じたと考えられる。

近年、この入江内湖遺跡にも考古学的調査が実施されるようになった。たとえば昭和51年、小字西野で調査が実施されている。調査地は厳密には、入江内湖の外側になるが、ちょうど矢倉川が内湖にそそぐデルタ地帯であった。遺構として、古墳時代中期の掘立柱建物、ピット等が検出されている。遺物としては弥生式土器をはじめ、布留式土器、須恵器が多量に出土している。また金属器としては、銅製鏃が出土している。



第3図　入江内湖西野遺跡遺構図

昭和六十年に実施した丸葭地区の調査では、遺構は検出されなかったものの、保存状況が良好な木製品を多量に包含する腐触土層（スクモ層）が検出された。木製品は鍬、鋤などの農耕具をはじめとして、たも、弓、櫂、紡織具と多岐にわたっている。同層中からは布留式土器のみが出土していることから、木製品の時期も古墳時代前期後半のものと考えられる。

また昭和六十一年に実施した行司町地区では、遺構は自然河川を検出したにとどまったが、丸葭地区同様、木製品を包含する腐触土層（スクモ層）を検出した。出土木製品は総数3,000点以上で、すべて古墳時代前期後半のものである。特に注目されるのは、直弧文を線刻した四脚付盤や円板、赤色顔料を塗った直径45cmにおよぶ木製高杯、および多量の祭祀具（刀形、剣形、鏃形、舟形）などである。

このように内湖遺跡という特性上、木製品の保存状態は極めて良好であり、木製品の宝庫というべき遺跡である。

2　筑摩御厨跡遺跡

（遺跡番号　6　／　参考文献　25.31）

筑摩の湖岸では、土師器、須恵器、灰釉などの破片が認められる。しかし大部分は磨滅しており、長期間波に洗われて、流れついたものであろうと考えられる。今回の分布調査中、弥生時代に属すると考えられるサヌカイト製の石槍を入江小学校前の浜辺で採集したが、これもローリングが激しく、原位置を保つものではない。

昭和六十年に浜辺より東側約30m内陸部で一部分発掘調査を実施した。遺構は検出できなかったが、包含層よりバラエティーに富む遺物の出土を見た。

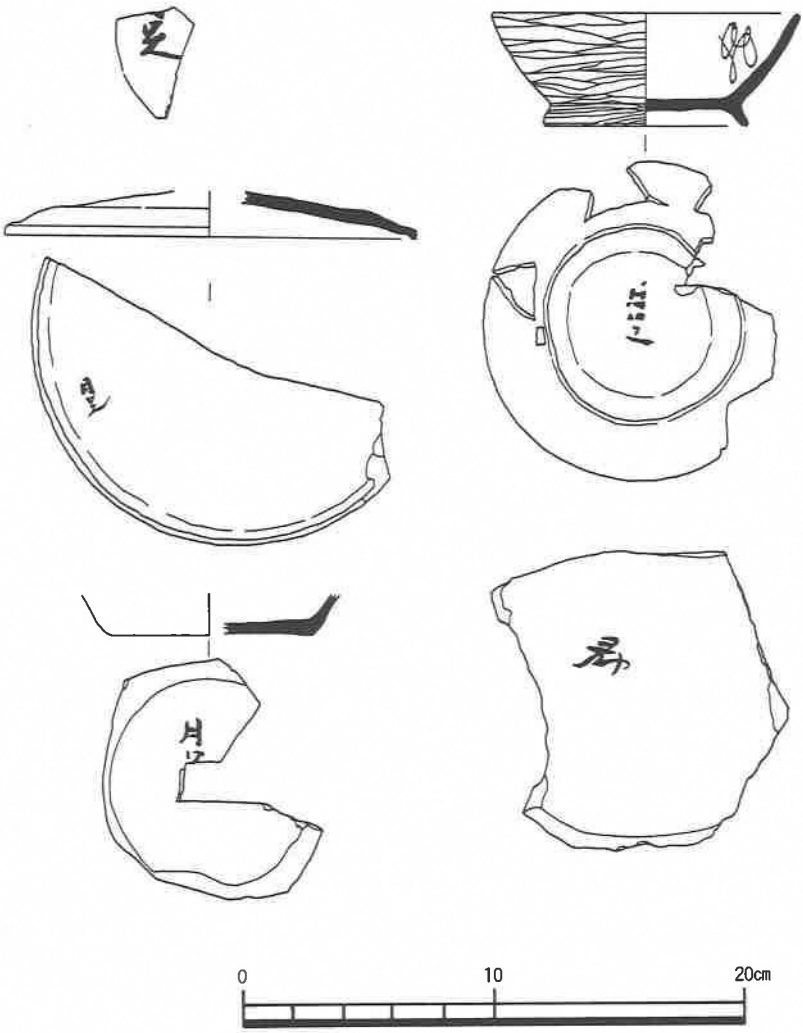
須恵器、土師器の組成は豊富であり、その時期も８世紀末から９世紀にかけてのものである。須恵器壺Ｇや土師器坏の調整とともに、「月足」「郡」等の墨書土器の出土は官衙的色彩が認められる。また鉄製刀子、雁股鏃をはじめ、皇朝十二銭のうち「神功開宝」や緑釉埦、風字硯の出土は官衙的遺跡としてのより強力な証しといえよう。

筑摩の地は宮内省大膳職筑摩御厨（延暦十九年以降は同省内膳司に移る）のあったところであるが、その所在地は従来不明であった。『類聚三代格』所収延暦十九年(800) 五月十五日の太政官符に「筑摩御厨」とあり、平安時代初期にはすでに御厨として機能していたことは確実である。発掘調査で出土した遺物が平安時代初期に相当することから御厨の時期と一致する。遺構が見られないことより、建物規模やその構造を知ることはできないが、調査地付近に筑摩御厨が存在していたことは確実である。今後の周辺地域の調査に期待したい。

なお出土遺物中に布目瓦が若干認められる。嘉吉元年（1441）の『興福寺官務牒疏』に、

「筑摩神　在坂田郡筑摩浜、号今江寺、神主弐人、神人五人、社僧一人」

とあり、筑摩神社に今江寺という神宮寺のあったことが知られる。出土した瓦片がこの今江寺に使われたものか、筑摩御厨に直接使用されたかは不明である。しかにいずれにせよ瓦で葺かれた建物が近辺にあったことは確かであり、調査地周辺の狭い地帯～琵琶湖と入江内湖に挟まれた中洲～に御厨、筑摩神社、今江寺等が建ち並んでいたことが推察されよう。



第４図　筑摩御厨跡遺跡出土墨書土器実測図

3　磯山城遺跡

（遺跡番号　12
参考文献　23.26.29.30.40）

磯山城遺跡は室町時代、小谷城に居を構える江北の戦国大名浅井氏の出城として築かれた中世城郭跡として、『滋賀県遺跡地図』に記載されていた。

昭和五十九年に城跡北東端の尾根上および山麓を調査した結果、予想された城郭遺構は検出されず、縄文時代の遺物が多量に出土した。縄文時代の遺構としては埋葬施設が検出され、人骨も２体以上確認できた。このうち２号人骨と命名したものはほぼ完全な形で出土している。２号人骨の埋葬方法は非常に特異なもので、まずあお向に寝かせた後、腰の部分より足をまっすぐに頭部にまで折りまげた、いわゆるエビ折り状の形態であった。このような極端な折りまげ方は、死後硬直が起こるまでにヒモなどでしばらなければならなかったと考えられる。現在このような埋葬法の検出例は他に聞かない。２号人骨の性別は男性で年齢は30代後半から40代

と考えられ、身長は165～170cmと推定される。いずれにせよ、縄文時代の埋葬法を研究するうえで有益な資料となろう。埋葬の年代であるが、出土土器に時間的なばらつきがあり、決定しがたいが、最も新らしいものと併行すると仮定して、早期最終末に位置付けされる塩屋式土器併行期のものとしておきたい。人類学的にも他遺跡出土の縄文人骨と比較して、早期末としてあやまりないようである。

写真２　磯山城遺跡屈葬人骨

出土遺物に関しては、まず土器であるが、縄文時代早期（黄島下層、高山寺、茅山下層、八崎Ⅰ式、粕畑、上ノ山、入海Ⅰ、入海Ⅱ、石山、天神山、塩屋など）前期（北白川下層Ⅰａ、同Ⅰｂ、同Ⅱａ、同Ⅱｂ、同Ⅱｃ、同Ⅲ、大歳山、諸磯ａなど）中期（鷹島、船元Ⅰ、同Ⅱ、同Ⅲ、里木Ⅱ、北白川ｃ、北裏ｃ、新保、咲畑、貉沢など）後期（中津、縄手、北白川上層、元住吉山Ⅱ、宮滝など）晩期（滋賀里、船橋、長原など）の各時期の各地域の土器が多岐多様に出土している。特に早期末の条痕文系の土器群は大津石山貝塚とほぼ一致しており、東海系の土器群が一括して近江でも出土することは興味深い。

第５図　磯山城遺跡出土高山寺式土器実測図

石器は石鏃、石斧、石錘、磨き石、石棒、石匙、石錐などが出土している。これら石器の石材の原産地は、サヌカイトは大阪府の二上山および岐阜県の下呂のものであり、黒曜石は島根県隠岐島久見産のものを用いていることが判明している。久見産黒曜石に関しては磯山城遺跡が東限地である。

自然遺物としては多量の獣骨がある。哺乳綱ではイノシシ、ニホンジカ、イヌなどで、鳥綱（種不明）、硬骨魚綱（種不明）、は虫綱のスッポン、その他掘足綱（二枚貝）が認められた。これらには折られた痕跡や焼けたものがあり、明らかに食用にされた後、投棄されたものである。

このように磯山城遺跡は近畿地方でも有数の縄文遺跡であることが判明したが、調査面積もそう広くなく、残念ながら住居跡や貝塚等を検出することはできなかった。しかし遺物の出土

量からして、ごく近くに集落のあったことはまちがいない。前面に入江内湖、琵琶湖の湖の幸、後方に磯山から武奈、霊仙にかけての山の幸が豊富にあった当遺跡周辺は狩猟採集の縄文人にとっては非常に住みやすい地であったといえよう。

なお縄文早期の土器が出土する最下層面は地表下５メートルの地点であり、これは海抜81メートル付近ということとなり、現琵琶湖水面（Ｔ.Ｐ.84.371）より３メートル以上低くなるわけである。これは縄文時代の琵琶湖を考えるうえで非常に重要な問題を提起してくれる。つまり、たとえ湿地であったとしても縄文時代早期には、現琵琶湖の3.4メートル水深部までは陸化していたと考えられるのである。

4　堂谷遺跡

（遺跡番号　14　参考文献　16）

堂谷遺跡は磯山東麓に所在する遺跡である。鴟尾断片、三重弧文軒平瓦、布目瓦片が出土していることに加え、“北堂谷”“南堂谷”“堂前”などの小字が残ることから、磯廃寺、堂谷廃寺とも呼ばれている。

しかし谷部には寺院の痕跡を示す土壇や地割りは地表面では観察できない。また詳細に遺物の分布状況を調査したが、遺物は採集できなかった。このように鴟尾等の出土はあるが、寺院跡であるか否かは不明であり、窯跡などの可能性も大である。

さて、堂谷遺跡出土の鴟尾は、磯崎文五郎氏によって発見されたもので、右側面鰭部を中心とする大形の破片である。胴部は無文で、断面方形の突帯を貼りつけ縦帯とし、鰭部外面に正段型を削り出している。また鰭部端面寄りに縦帯と同様の突帯を貼りつけ、幅広い縦帯に正段型をあらわすように見せている。製作年代は、７世紀後半と考えられる。

なお、『日本古代の鴟尾』によると、この断片以外に、鰭部の小片が１点出土していることが記載されている。現在この破片の所在は不明であるが、同書によると、鰭部端面に沿ってコンパスを利用した連珠文を描き、その内側に２条の沈線を平行してあらわすとある。

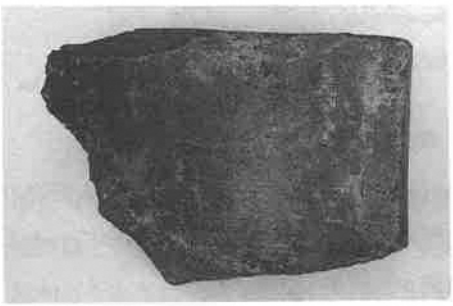


写真３　堂谷遺跡出土平瓦

鴟尾以外の出土遺物としては、『日本古代の鴟尾』によると、三重弧文軒平瓦の出土を掲載しているが、これも所在は不明である。

分布調査で新たに土地所有者から、以前耕作中に出土したという布目瓦と土錘の所在が確認できている。

5　磯崎古墳群

（遺跡番号　11　参考文献　4.6.11）

磯崎古墳群は、大正九年に湖岸道路（現在の県道長浜能登川線）工事中に発見されたもので、６基から成る後期の群集墳である。現在は消滅しており、遺物のみ磯崎神社に所蔵されている。

しかし磯崎古墳群の周囲には、ヒジリ山古墳、神塚古墳、丸山西古墳等が認められ、磯山南

麓は町内における古墳の密集地といえよう。

磯崎古墳群について、『改訂近江国坂田郡志』により、それぞれの古墳の概略を以下に記しておく。

第1号墳　羨道の長さ12尺、幅4尺5寸で高さは5尺を測る。玄室の長さは12尺、幅10尺で高さは10尺を測る。主軸は南北方向。

第2号墳　第1号墳の東側に位置し、羨道の長さ1丈2尺、幅4尺5寸、玄室の奥行1丈2尺、幅1丈5寸を測る。天井石は古く寛永十七年に取りはらわれている。主軸は南北方向。

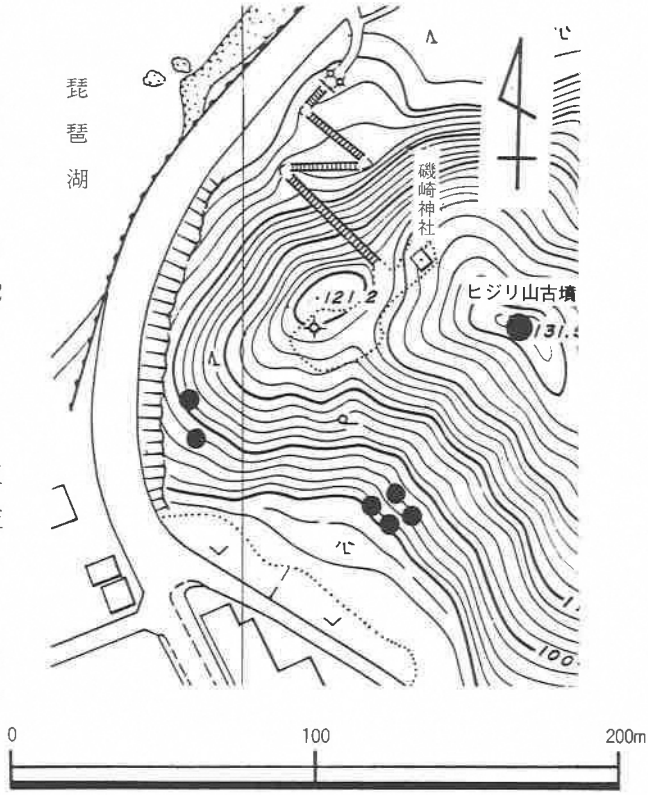
第3号墳　大正十二年に発見されたが、構造は、玄室の幅が10尺であったこと以外、詳細は不明である。

第4号墳　昭和十年に発見されたが、石室の大部分はすでに破壊されており、詳細は不明である。

第5号墳　昭和十三年に発見されたが、玄室がわずかに残っていたにすぎなかった。

第6号墳　昭和十六年の郡志刊行時には、羨道部分と考えられる石材が露出していたにすぎない。

これらの古墳から出土した遺物としては、勾玉、管玉、銀環、直刀、須恵器坏身、坏蓋、高坏、提瓶などがあり、また土錘の出土は注目される。

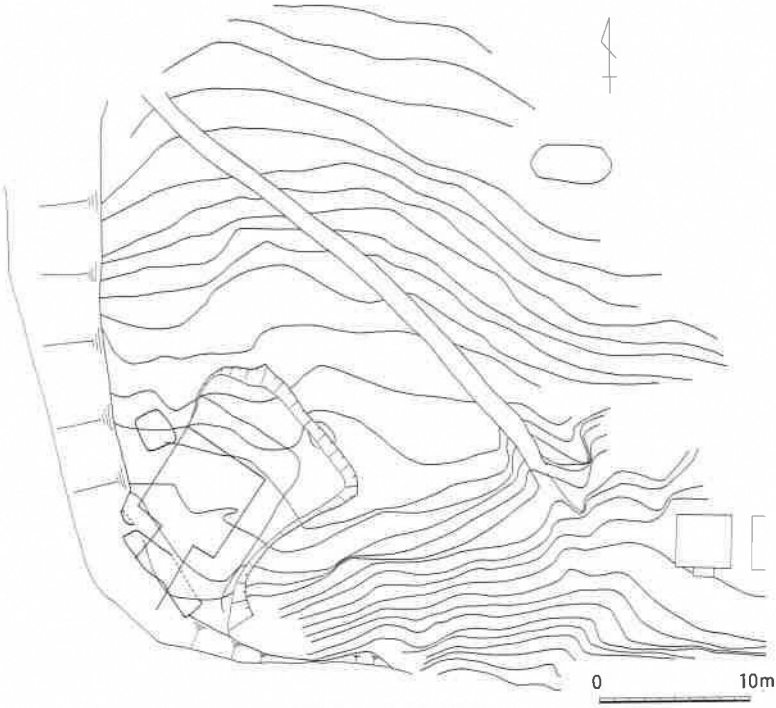


第6図　磯崎古墳群位置図

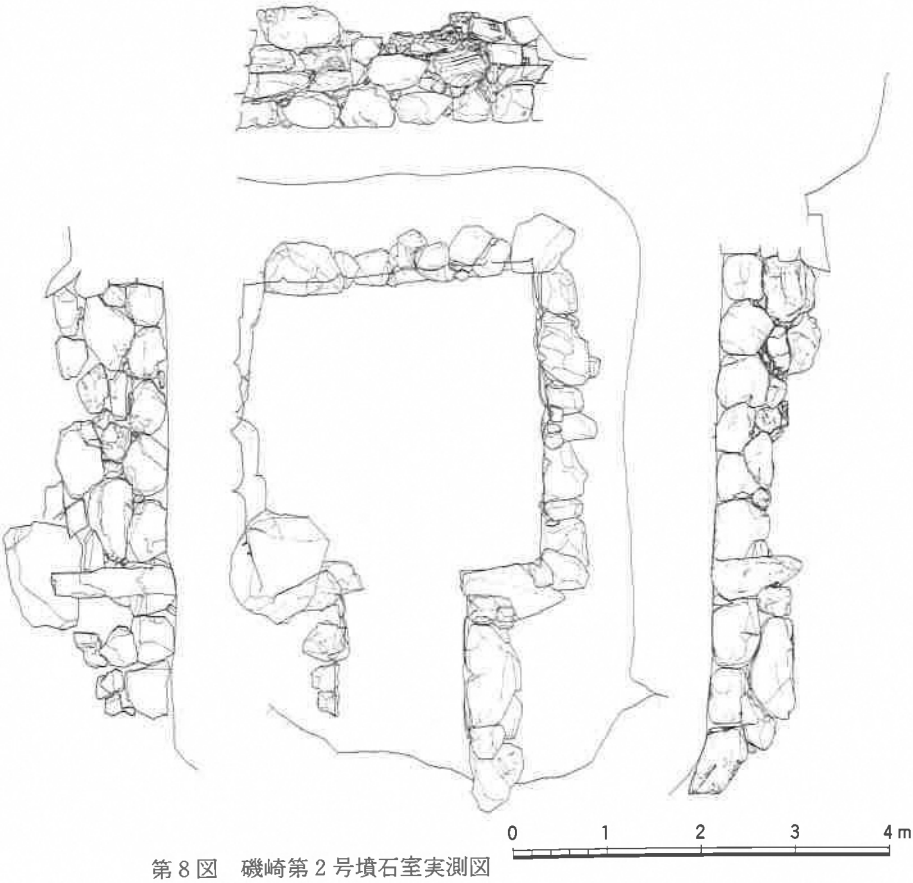
写真4　磯崎古墳群出土遺物(磯崎神社所蔵)

なお第2号墳については、昭和四十七年に発掘調査がなされている。遺物については、すでに大正九年に発掘されており、ほとんど検出できなかった。しかし石室のプランはおおよその構造を知ることができた。

調査結果によると、羨道の残存長4.9m、幅2.7m、玄室の長さ6.2m、幅6.0mを測り、その玄室がほぼ正方形のプランであったことが確認された。この玄室のプランは大津北郊の滋賀里古墳群に類似するもので、渡来系氏族との関連が考えられる。また出土遺物中に土錘のあることより、眼前に広がる琵琶湖の湖上権や漁業権を支配した“海人”との関連も考えられよう。



第７図　磯崎第２号墳周辺図



第８図　磯崎第２号墳石室実測図

6　立花遺跡

（遺跡番号　36）

立花遺跡は上多良に所在する遺跡で、古くより土器片の散布が認められていた。昭和六十二年、県営ほ場整備事業が遺跡周辺で実施されることとなり、町教育委員会が主体となって事前に発掘調査をおこなった。

調査の結果、立花遺跡は弥生時代前期から中期に至る遺跡であることが判明した。従来米原町内では磯山城遺跡を主とする縄文時代の遺跡と、入江内湖遺跡を主とする古墳時代の遺跡は確認されていたが、その間を埋める弥生時代の遺跡は確認されていなかっただけに、立花遺跡の存在は大きい。

特に弥生時代前期中段階に相当すると考えられる土器群の出土は、近江への弥生文化の伝播を解明するとともに、立花遺跡の周辺で滋賀県で最も古い段階に水稲耕作がおこなわれたことが判明した。

前期につづいて中期の遺物も多量に出土している。特に中期には住居跡と考えられる竪穴や、貯蔵穴と考えられる不定形の土壙、ピット、溝などの遺構が検出されている。土器も豊富で、東海のパレススタイルの土器をはじめ、流水文、波状文、列点文、簾状文などの文様を施したもの、丹塗り土器やヘラ記号を持つ土器などが出土している。

写真５　立花遺跡遺構検出状況

また中期では玉造りの遺物の出土が注目される。細形管玉は原材料に緑色の碧玉を用いている。原石は分析の結果、佐渡島のものと考えられる。管玉は完成品だけではなく、未成品も含まれており、立花遺跡の中で玉造りがおこなわれていたことを示している。事実管玉を造るのに用いた紅簾片岩製の石鋸をはじめ、、砥石、楔形石器、石斧、石錐などの工具類も同時に出土している。

石製品に関しては、玉類以外にも数多く出土している。磨製の石鏃とその材料である粘板岩、打製石器に用いられた二上山（大阪府）や下呂（岐阜県）からもってこられたサヌカイトなどである。

立花遺跡は弥生時代以降も集落が営まれていたようで、古墳時代の土師器、須恵器、鉄刀などが出土している。

7　薗華寺遺跡

（遺跡番号　35　参考文献　38）

薗華寺は嘉吉元年（1441）に作成された、『興福寺官務牒疏』に、

「薗華寺、在多良、僧房六宇、本尊弥勒大士、伊吹山三朱上人開基」

とあり、近江町字賀野に所在していた歓喜光寺の別院であった寺院跡と考えられる。現在も小字に“下円ケ寺”の地名が残り、付近からは古くより土器片等が採集されている。

昭和六十一年、当該地を中心として、県営ほ場整備が実施されることとなり、町教育委員会は事前に発掘調査をおこなった。

調査の結果、遺構は検出されなかったが、上、下２層にわたる遺物包含層が確認できた。上層は標高85.5m付近で、須恵器坏、坏蓋、甕、土師器坏、皿等が出土した。なお上層で１点であるが、布目瓦も出土している。

下層は標高84m付近（現地表面下1.5～2.0m）であり、布留式甕、高坏、須恵器坏身、坏蓋、広口壺などが出土している。この下層は標高から見ると、入江内湖遺跡等の低湿地遺跡とほぼ同様である。

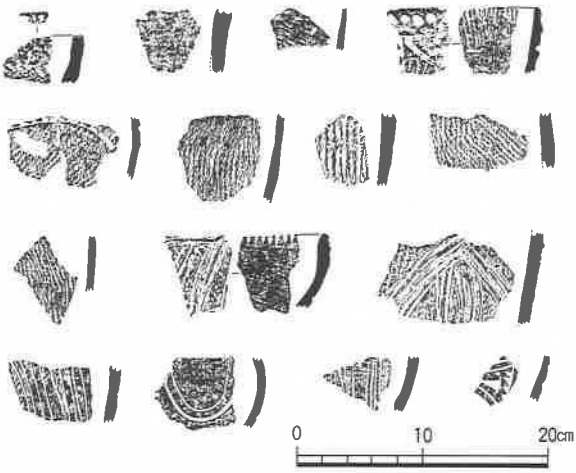
調査自体は排水路という非常に限定された範囲であり、遺跡の性格を把握するまでには至らなかったが、周辺部一帯に古墳時代と平安時代前期の遺跡が存在することは確実である。

8　筑摩佃遺跡

遺跡番号　37
参考文献　38

筑摩佃遺跡は従来まったく知られていない遺跡であった。昭和六十一年、遺跡の周辺で県営ほ場整備が実施された際、偶然に遺物の散布が確認された。この遺物の採集により、小字から筑摩佃遺跡として、遺跡の発見届を文化庁に提出した。

残念ながら工事はすでに終了しており、正確な土層は確認できなかった。わずかに残された工事の掘り方を観察すると、耕土、粘土、黒色粘土となっており、排土中の土器片は、このうち黒色粘土に包含されていたと考えられる。この黒色粘土層は前述の薗華寺遺跡下層の黒色粘土に対応するものと考えて、ほぼまちがいない。つまり中多良集落と朝妻筑摩集落の間に広がる水田地帯は縄文時代から平安時代に至る一大複合遺跡であるといえよう。



第９図　筑摩佃遺跡出土縄文土器実測図

さて採集した土器は、縄文式土器、弥生式土器、古式土師器、須恵器であった。縄文式土器に関しては茅山下層式に属すると考えられる早期の土器をはじめ、中期の船元II式、船元III式、船元IV式、晩期の八日市新保式などが出土している。

工事の排出土という条件のため、前期および後期の土器片は採集しえなかったが、磯山城遺跡同様、早期から晩期まで継続していた集落跡ではないかと考えられる。

9　太尾山城跡

（遺跡番号　28）

『近江坂田郡志』によると、室町時代京極氏の臣米原氏の居城とある。また山麓湯谷神社に伝わる棟札には、

「文明四壬辰五月二十一日始之、奉行被官米原右馬近時」

とあり、米原氏の名前を伝えている。

米原町に所在する中世城館跡のうち、太尾山城跡、磯山城跡は坂田郡の南端に位置しており、江北と江南の接点にあたる。このため六角氏と京極氏のつねに最前線にあったことは確かである。

京極氏にかわり、江北を支配した浅井氏もこの重要地点に注目し、永禄四年（1561）六角承禎が出陣中に、長政自らが太尾山城の攻略に出陣している。太尾山城には当時六角方の城将吉田安芸守らが守備していた。浅井方の今井定清は攻撃に失敗し、太尾山城は浅井方に落ちなかった。

なお、『大原観音寺文書』（87、3-36）によると、

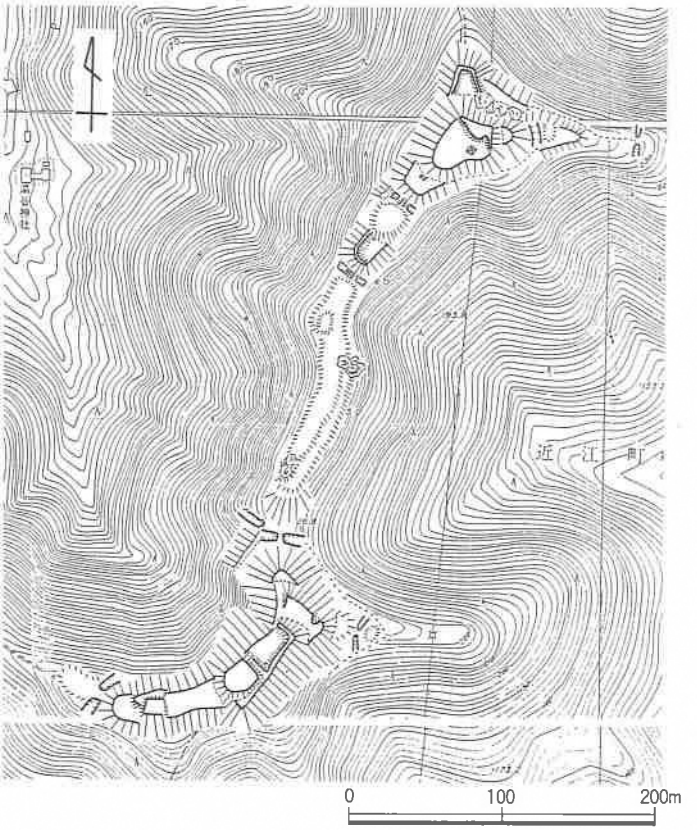
「中嶋宗左エ門尉直頼書状」

「太尾門矢蔵之用、上野より材木三本召寄候、云々」

とあり、当時太尾山城は浅井方の城として機能していたとともに、中世城郭における櫓の存在を示す、貴重な文書である。

現存する遺構は町内に15ケ所あったといわれる中世城館跡の中では、鎌刃城跡とともに非常に良好な状況で残っている。

城郭は大きく北城と南城に分かれており、その間は自然地形となっている。これは築城の時期差によるものか、あるいは同時期に併存した、いわゆる“別城一郭”に相当するかは今後の研究課題である。



第10図　太尾山城跡概要図

ただ両城跡ともに土塁をめぐらし、尾根筋に堀切りは設けているが、虎口に升形や横矢掛りなどは認められないことから、現存遺構の年代は天正年間(1573～1592)以前の可能性が高く、おそらく浅井氏段階のものであろうと考えられる。

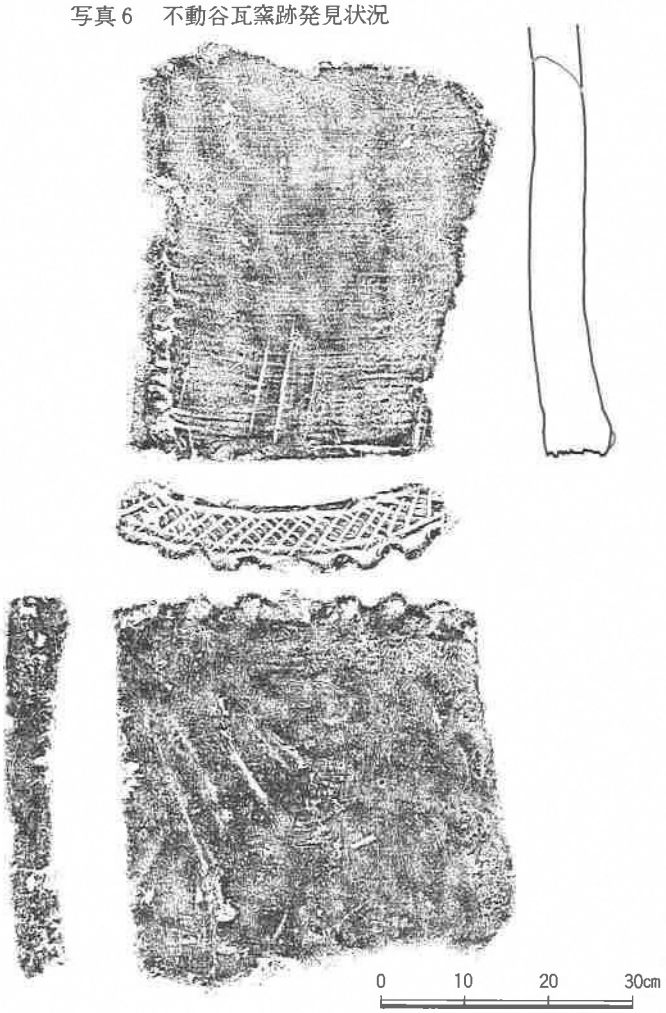
10　不動谷瓦窯跡

{遺跡番号　67
参考文献　14}

写真6　不動谷瓦窯跡発見状況

昭和四十九年、関西電力湖東変電所の道路工事中、不時に発見された瓦窯跡である。窯体の規模や構造は不明であるが、当時の写真から見ると、おそらく登り窯形式であったと考えられる。出土した瓦は大半が平瓦であったが、1点軒平瓦が出土している。この軒平瓦はその文様を型からおこしたものではなく、ヘラで線刻し、下端部を指頭によって波状に抑えている。これに類するものとしては、高月町保延寺出土のものがある。ただし、まったく同一の文様構成をとる瓦は、いまのところ出土例がなく、この窯跡からの供給先は不明である。共伴遺物がなく、瓦の型式も不明であるため、時代の決め手に欠くが、一応白鳳時代と考えられる。

なお窯跡と古代寺院が隣接していると想定するならば、不動谷窯跡の東側に、聖徳太子創建を伝承にもつ名刹蓮華寺の存在をつけ加えておく。



第11図　不動谷瓦窯跡出土軒平瓦実測図

11　鎌 刃 城 跡

遺跡番号　74
参考文献　36

鎌刃城跡は坂田郡の代表的な中世山城跡である。鎌倉時代に地頭土肥氏によって築城されたと伝えられるが、集落よりかなり離れた山中に立地しており、在地領主の城とはやや趣を異にする。むしろ、室町時代に江北と江南の国境の城として、築城されたものと考えられる。事実

写真７　鎌刃城跡主郭土塁

写真８　鎌刃城跡堀切り

第12図　鎌刃城跡概要図

天文四年（1535）六角定頼は、京極高延（高明または高広）、高政らが犬上郡に侵入した際、今井夜叉丸に鎌刃城を攻撃させている。この時期鎌刃城には堀次郎左衛門尉元積が守備している。堀氏は元亀二年（1571）、織田信長に下り、浅井氏滅亡後、坂田郡内で六万石を領したという。

城跡は標高384m（比高255m）の山頂部に位置している。北・東・西は深い谷となっており、南方の屋根筋には7条にのぼる堀切りを設けて屋根を切断している。

主郭は周囲を石垣で固めており、曲輪内には礎石が点在することにより、かなりの規模の建物があったと考えられる。また主郭の虎口は内升形を呈している。

北西尾根の先端は3条の堀切りを設け、尾根上の削平地には石垣や内升形の虎口が見事に残っている。

西側曲輪群の先端にも2条の堀切りを設けるとともに、先端部南方の緩斜面には防御強化のために“畝状竪堀群”を設けている。

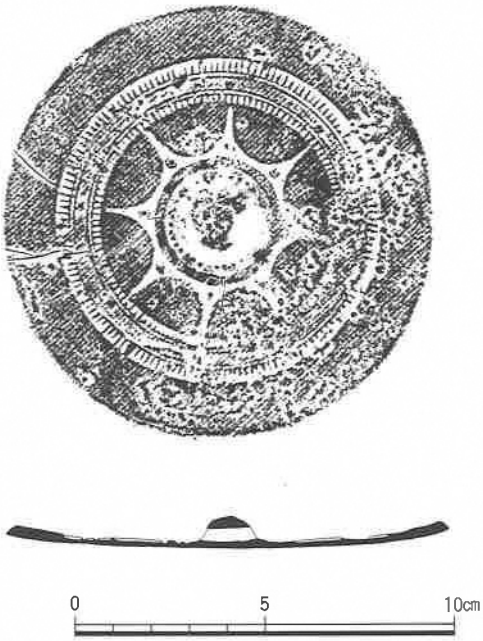
このように所領支配の城というよりは、純軍事的な城塞としての色彩が強く、しかもその構造より、現存する遺構は戦国時代末期のものと考えられそうである。特に“畝状竪堀群”の存在から天文～元亀にかけての段階の築城と考えられる。『信長公記』元亀二年の「みのうら表、堀・樋口の城」こそがまさしく現城跡を表わしているのであろう。

なお、付近には鎌刃城の水の手と称する石樋をはじめ、土肥屋敷、殿屋敷という小規模な城郭遺構も認められる。

12　石淵山古墳群

（遺跡番号　62　／　参考文献　5.10.19）

古くは牛打の古墳と呼ばれていた後期の群集墳である。『近江坂田郡志』によると、明治十六～十七年頃、採土中に石室を発見したが、破壊されてしまった（第1号墳）。ただもう1基は畑地であるが現存しているとある（第2号墳）。『改訂近江国坂田郡志』には、現在伝えられている内行花文鏡と金環および所在地不明の直刀、轡を、1号墳からの出土品としている。また古墳第2号として、大正五年に石灰製造所の製造窯建設に際して、地下6尺地点より祝部式土器（須恵器）が出土したとある。さらに昭和九年、工場拡張のため、同古墳より採土をしたところ、地下6尺の地点より石室が発見された。石室は幅約7尺、長さ1丈2尺を測り、祝部土器、金環、鉄鏃などが出土したという。これが先の郡志に記されている第2号墳と同一のものである



第13図　石淵山古墳群出土内行花文鏡実測図

か否かは不明である。なお、島田〔1918〕によると、内行花文鏡は大正七年の出土と記しており、第２号墳からの出土とも考えられる。島田はさらに内行花文鏡を出土した古墳は、前方後円墳としている。

昭和三十五年には名神高速道路が、石淵山古墳群を通過することとなり、事前に発掘調査が実施された。ただ報告書〔西田：1961〕によると、この時調査されたのが石淵山古墳群の最後の１基であると記されている。

写真９　石淵山古墳群

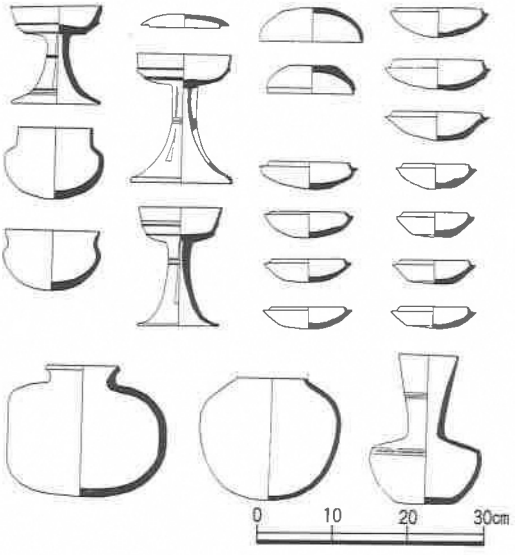
調査の結果、天井石はすでに失われている横穴式石室であることが判明した。石室はほぼ南南西に開口した片袖式の石室で、羨道部の幅は約１ｍを測る。玄室は奥壁が崩れていたため、正確な長さは不明であるが、約3.5ｍであったと推定される。玄室の幅は奥へ行くほどやや広がりをもっており、羨道部との境界部で1.2ｍ、奥壁近く1.6ｍを測る。

出土遺物は金環、鉄鐔、刀子、須恵器坏身、坏蓋、高坏、直口壺、長頸壺、広口壺、横瓶などであった。

現在、石淵山古墳群には、玄室奥壁部分が露出している古墳が１基と、さらに天井石ではないかと考えられる石材の露出している所が２ヶ所あり、名神高速道路に伴う調査が最後の１基でないことは確かである。

さて、第１号墳出土と伝えられる内行花文鏡は直径11.7㎝で、鏡面中央の紐座を点線文と太線文帯が周り、内区は八花の内行花文で囲み、その間に素乳を８個配し、直角様の放射線より成る櫛歯文を配している。櫛歯文中には朱の付着が顕著に認められる。島田貞彦は仿製鏡としているが〔島田：1918〕、近年舶載鏡ではないかと考えられている。

なお、発見の経過は不明であるが、米原町立河南中学校にも石淵山古墳群出土の遺物が所蔵されており、その内容は鉄製馬具、鉄鏃、直刀および須恵器坏である。



第14図　石淵山古墳群出土土器実測図（文献10）

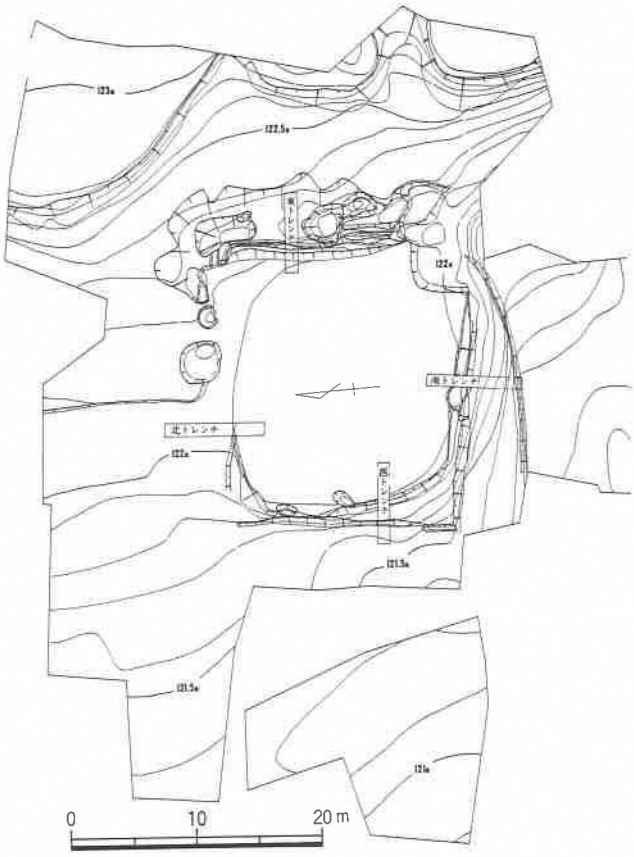
13　三大寺廃寺

遺跡番号　48
参考文献　14.18.21.22

枝折に所在する三大寺廃寺は古くより古瓦の出土するところとして知られており、三大寺跡と呼ばれていた。また三大寺とは３つの大きな寺ということで、隨泉寺、福遊寺、多聞寺と呼ばれる寺があったとも伝えられている。一方古瓦の出土することから考古学研究者の間では枝折廃寺とも呼ばれていた〔坪之内：1983〕。

昭和五十七年度にほ場整備事業に伴い、発掘調査が実施された。調査の結果、６世紀末～７世紀初頭の竪穴式住居跡３棟、横穴式石室古墳２基(塚原古墳群、後述)、寺院の基壇と考えられるもの１基、平安時代後期（折戸53号窯、東山Ｇ－105号窯相当）の掘立柱建物13棟が検出された。

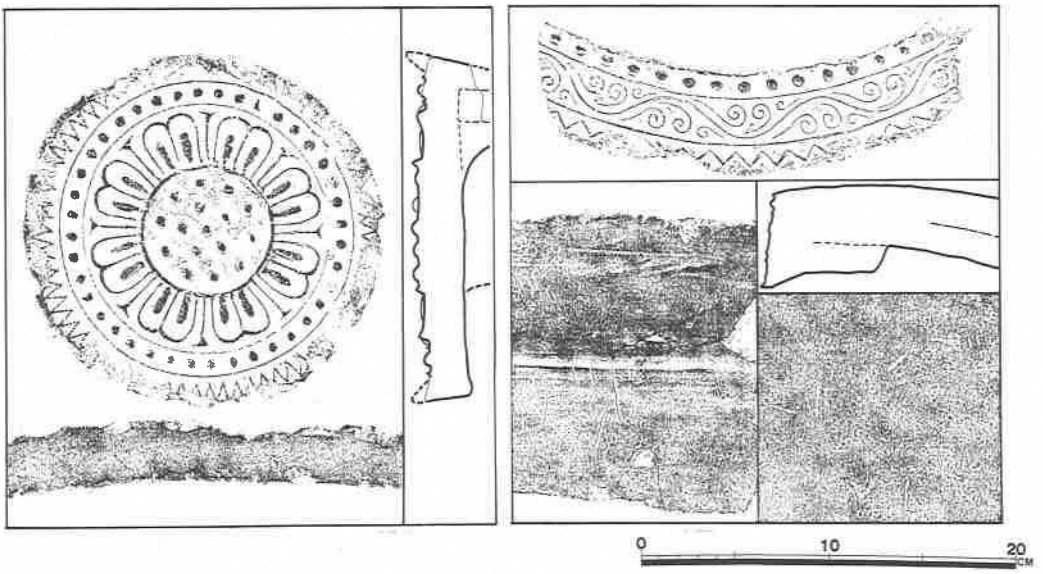
基壇は東西24m、南北21mと東西に長い長方形のプランを持ち、軸線はほぼ磁北線上にあり、自然地形の整形と版築を施した盛土により築成されている。これは80尺×70尺の規模と考えられ、建物は瓦の出土状況から、４面に庇のある入母屋あるいは寄棟の形態を取っていたものと考えられる。



第15図　三大寺廃寺検出基壇跡実測図

出土遺物の大半は瓦類であった。軒瓦に関しては、ほとんどが単弁八葉軒丸瓦と四重弧文軒平瓦であった。わずかに異形のものがあるが、差し替えであろう。須恵器に関しては藤原宮跡ＳＤ1901－Ａ下層から平城宮跡ＳＤ1900出土遺物に相当し、飛鳥Ⅳ期から平城宮跡第Ⅰ期、実年代で685年から715年の間に納めることができる。このことは、出土した瓦の年代幅を示すだけでなく、早くて天武朝末年に堂の建立がなされ、おそくて715年頃に堂が廃絶したことを示している。

ただ古くより古瓦の出土が知られる米原町立醒井小学校付近では、従来の出土遺物は知られているものは全て複弁八葉軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦であり、基壇跡出土の軒瓦類と様相が異なってい



第16図　寺尾地区(醒井小学校校地)出土の本薬師寺式軒瓦実測図

る。この２ヶ所の遺物出土地点は約250m離れており、その間には枝折川が流れている。両地域の堂宇の性格については今後とも検討が必要である。また、検出した基壇以外に、周辺に建物の存在は考えられず、醒井小学校々地においても、瓦の出土位置から見る限り、少なくとも瓦葺建物は一宇のみである可能性が強く、三大寺廃寺を単純に古代寺院跡とすることにも慎重を期す必要があろう。

14　塚原古墳群

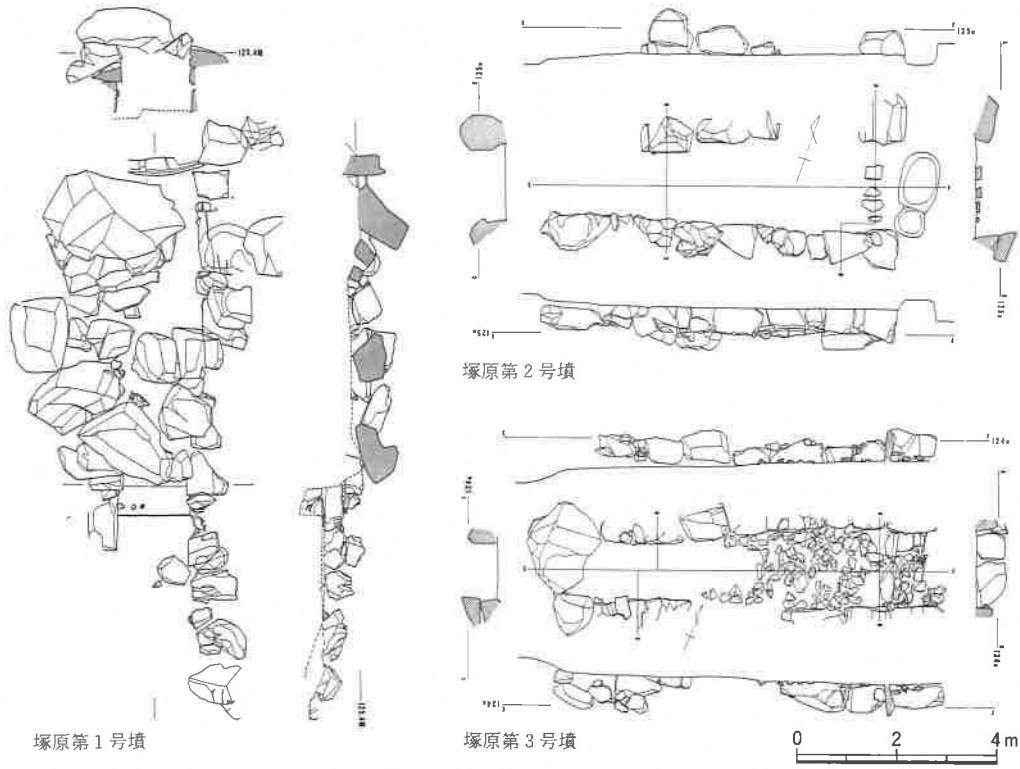
（遺跡番号　47　参考文献　17.22）

三大寺廃寺の付近に点在する後期の群集墳であるが、既に封土を失なっており、その正確な数は不明である。過去３基が調査されているので、以下記述する。

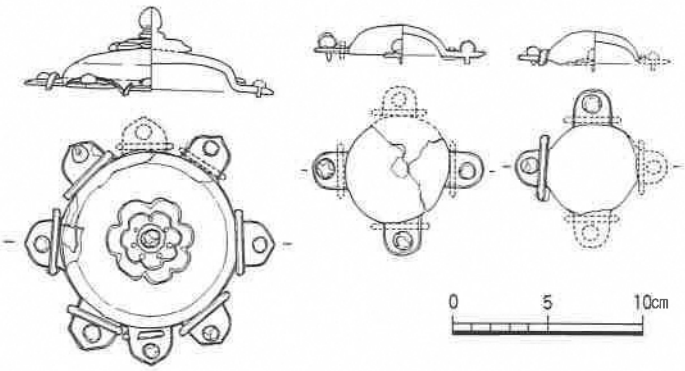
第１号墳　墳丘が残っており、昭和五十五年に試掘調査のみ実施された。現状では長径14m、短径９mの楕円形を呈している。主体部は西に開口する横穴式石室で、ほぼ東西に軸線を持っている。天井石は玄室付近のみ一石残っているだけである。完掘していないので、側壁の上端で計測すると、現存長10.8m、玄室の幅２m、長さ5.3m、羨道の幅1.5mであった。石室の石材はすべて石灰岩である。

第２号墳　昭和五十七年度に調査を実施したもので、N72°30′Eの方面に軸線を持ち、西に開口する横穴式石室を有する。現存長7.2m、玄室長4.24m、玄室幅1.6～1.8m、羨道幅1.4mを測る。玄室は奥壁側がやや広く、玄門部は石材を縦位置に置いて玄室と羨道を区別し、両裾の形式を取っている。

副葬品の遺存状況は良好で、須恵器、土師器、鉄製品、馬具、装身具等があった。須恵器は、坏、蓋、有蓋高坏、無蓋高坏、提瓶、平瓶、瓶、台付長頸壺、直口壺、短頸壺、 埦の11器種、



第17図　塚原古墳群石室実測図



第18図　塚原第２号墳出土馬具実測図

土師器は壺の１器種であった。鉄製品は鏃、刀手、馬具は雲珠、辻金具、装身具には勾玉、管玉、ガラス小玉、石製玉等がある。

また人骨の遺存状況も良好で、計７体の埋葬が考えられる。これは坏類で見る限り、６次にわたる埋葬を考えることが可能である。この坏の６型式は、６世紀末から７世紀の第２四半期頃までの間に納めることができる。

第３号墳　第２号墳と同じく昭和五十七年度に調査を実施したもので、両裾式の横穴式石室である。石室長軸はN69°Eの方向にあり、西へ開口する。現存長８m、玄室長4.9m、幅は奥壁部で1.5m、中程で1.6m、羨道の幅は1.16mを測る。玄室の最奥部には、幅0.5～１m、高さ0.5～0.6mの板材の石材を２石用い、玄室長軸に直交して横位置に立て並べ、幅0.6m程の小室をつくり出している。玄室部のみに敷石が認められる。

石室内より出土した副葬品は須恵器、鉄製品、装身具等があったが、その遺存量は極めて少

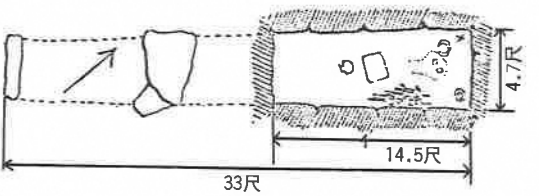
ない。

埋葬人骨は玄室内と小室から出土している。玄室内のものはほぼ１体分の人骨と考えられるが、玄室奥部の小室には少なくとも４体分の人骨が納められていた。これは構築状況から、第２次埋葬時に小室が作られ、追葬毎に遺骨を納めたものと思われる。改葬にも似た風習といえよう。

15　片山古墳群

（遺跡番号　45　参考文献　5）

三大寺廃寺、塚原古墳群を眼下に望む片山（通称伝吉山）の尾根南面に築かれた古墳群である。『改訂近江国坂田郡志』によると、大正七年、忠魂碑建設に伴い、１基が発見された。島田〔1918〕によると、経10間程の円墳で、横穴式石室であった。石室は全長33尺、玄室の長さ14.5尺、幅4.7尺を測る。遺物には提瓶、壺、坏、高坏などの須恵器をはじめ、銀環、銅環、轡、刀、鉄鏃などがあったとある。現在これらの遺物については不明である。現在少なくとも３基の古墳と考えられるマウンドが認められる。うち１基は既に盗掘をうけており、天井石が抜き取られている。いずれも横穴式石室を有するものと考えられる。



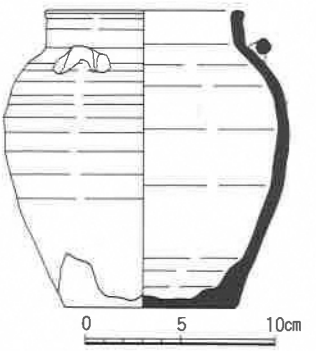
第19図　片山古墳群石室平面図（文献５）

16　醒井古墓

（遺跡番号　44）

昭和五十三年、治山事業の堰提工事の際、偶然発見された。出土した遺物はほぼ完形の瀬戸の灰釉の三耳壺である。釉は外面全域にかかっており、底部は糸切り痕を残す。15世紀のものであろう。内部には火葬骨が納められており、蔵骨器として用いられていた。

なお共伴して石製五輪塔および石仏が出土しており、付近一帯が中世古墓であったようである。



第20図　醒井古墓出土灰釉三耳壺実測図

17　醒井神籠石様列石

（遺跡番号　42　参考文献　1.2.3.15.24.32.34.37）

遺跡は米原町と近江町の境界上、標高293.2mの兜黛山山頂に位置している。石塁遺構はほぼ285mの等高線を取りまいており、その規模は南北約150m、東西約30～55mを測り、繭形を呈している。１部石塁が２重となった部分や、竪石垣状に支線となっている所がある。明治四十三年に中川泉三氏が遺跡を紹介して以来〔中川：1910〕今日に至るまで多くの論考が発表されている。それらは次の４つに分類できる。

写真10　醒井神籠石様列石

1．神籠石（霊域説としての神籠石）説
2．神籠石（山城説としての神籠石）説
3．朝鮮式山城説
4．中世山城説

である。北九州に分布する神籠石と比較してみると、北九州の神籠石が、加工された切石を列石としているのに対し、醒井の場合、自然石を無造作に積み上げているにすぎない。また規模の面からも、醒井の場合、非常に小規模であり、両者にはまったく共有性が認められない。

『日本書紀』天武天皇上元年条に、

「丙申、男依等、興近江軍、戦息長横河　破之。斬其将境部連薬」

とあり、醒井付近が横川駅にあたることより、この壬申乱の横河戦を醒井付近に求め、醒井神籠石様列石をその時の築城と見る意見もある。しかし遭遇戦である横河合戦において、石積の城が短時間のうちに築けるとはとうてい考えられない。しかも近世以降の地誌類にもこの神籠石様列石に記されたものはなく、まして地元には伝承なども存在せず、明治四十三年まではまったく知られていなかったのである。

現在まで詳細な測量調査や発掘調査は実施されておらず、出土遺物も知られていないため、その性格や築造年代は不明である。

18　下丹生古墳　（遺跡番号　54）

下丹生善仁寺の西裏山にある古墳で、直径16mを測る円墳と考えられる。西南に開口する無袖の横穴式石室を有する。現在町内に遺存する石室のなかでは最も残存状況の良好なものである。全長7.5m、玄室長5.5m、玄室幅1.6m、羨道幅1.15mを測る。大正二年発行の『近江坂田郡志』所載の写真を見ると墳頂に小祠があり、これを撤去した際、天井部がいためられたようである。遺物は、古くより開口していることもあって、何ら伝えられていない。本古墳の位置する丹生谷は幅200m、奥行2.5kmの狭隘な谷であるが、遺跡が多く分布する。これはこの地が息長丹生真人の本貫地と伝えられることと関連するものと考えられる。

写真11　下丹生古墳

なお下丹生古墳の北側にも古墳と考えられるマウンドがあり、数基より成る群集墳の可能性も高い。

IV. その他の町内出土遺物

ここでは、III・主要遺跡の概要で取り上げられなかった諸遺跡出土の遺物、特に今回の分布調査で採集することのできたものについて紹介したい（第21・22図）。

第22図－１は、米原駅前遺跡表採の石鏃である。石材はサヌカイト。第22図－２は同一地点で採集したサヌカイトの剝片である。

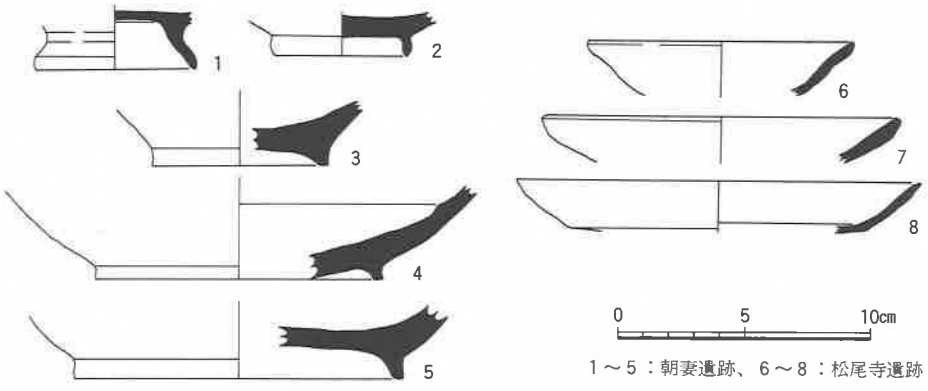
第22図－３は入江小学校前の湖岸で採集した、サヌカイトを石材に用いた両面加工の石槍である。全体としては木葉形を呈するが、中茎を作り出している。磨滅が著しく、風化は浅い。弥生時代に属する可能性が高い。

第22図－４は江竜遺跡で採集した、太形蛤刃の石斧である。

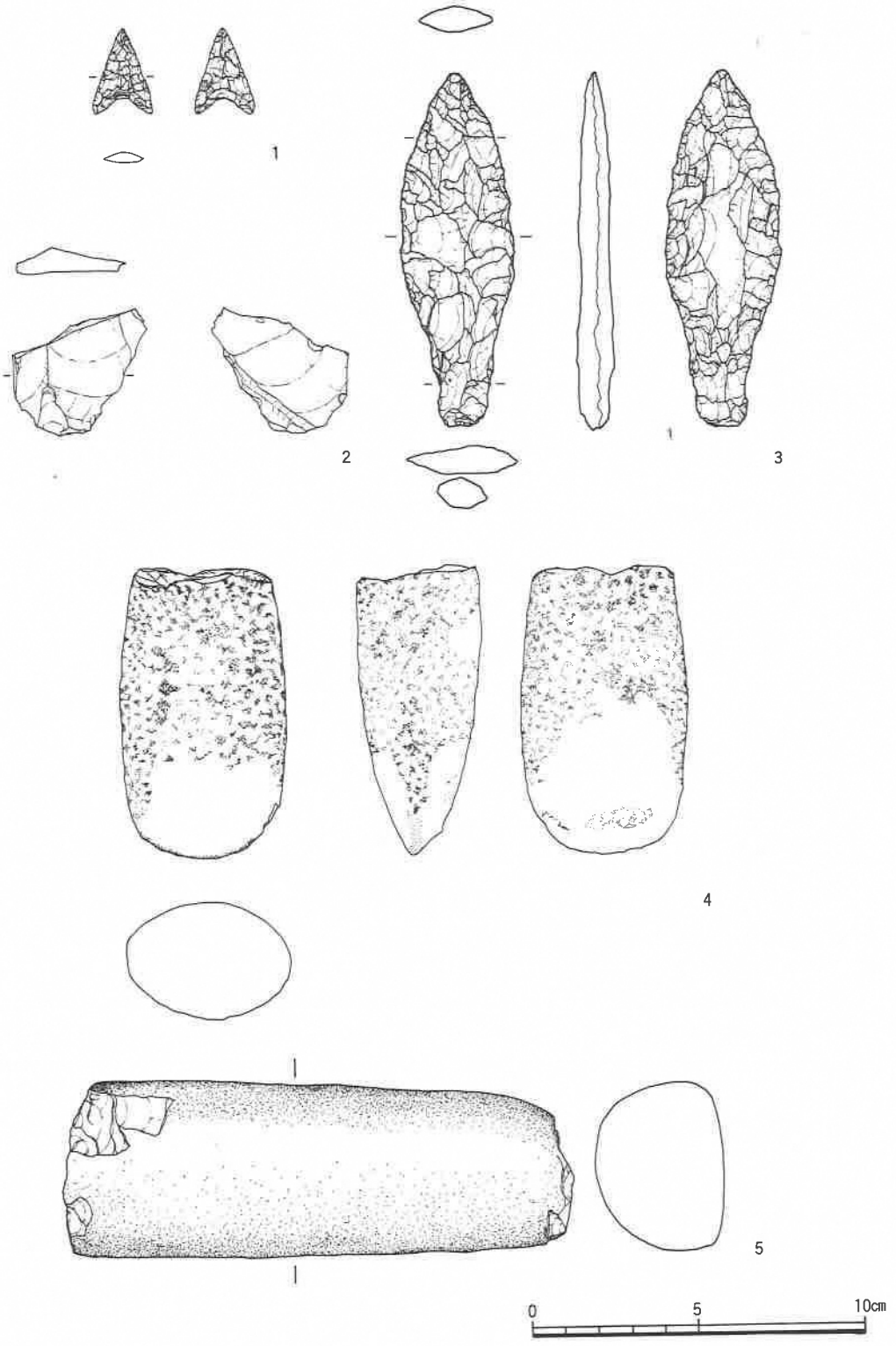
第22図－５は番場遺跡で採集した、石棒である。石材は不明であるが、結晶片岩ではない。全面磨製で、敲打痕や擦痕は見られない。両端は破損しており形状は不明である。

石器に関してはこれら以外に図示していないが、米原駅前遺跡でサヌカイト製のフレーク、朝倉Ａ遺跡で凹石とサヌカイト製のフレークが、朝倉Ｂ遺跡・上丹生Ｂ遺跡で同じくサヌカイト製のフレークを表採している。

第21図１～５は朝妻遺跡で採集した灰釉で岐阜県丸石窯～西坂１号窯併行期のものと考えられ、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。なお数点であるが奈良～平安時代の須恵器も採集しており、朝妻神社周辺には奈良時代から平安時代後半にかけての集落が存在したと考えられる。



第21図　町内出土遺物実測図



1～2：米原駅前遺跡、 3：入江小学校前湖岸遺跡、 4 ：江竜遺跡、 5 ：番場遺跡

第22図　町内出土遺物実測図

第21図６～８は松尾寺遺跡で採集した土師器皿である。中世末から近世の灯明皿かと考えられる。松尾寺遺跡は天台宗の山岳寺院跡で、現在も山中に数十に及ぶ坊院の跡が石塁をもって残っており、この土師器皿以外にも常滑の甕、金具、銭貨等を採集している。

土器類はこれら以外にも、町内の多くの地点で表採しているが、小破片が大半で図示はできなかった。特に注目できるのは岩谷遺跡より、窯体の壁に用いられたと考えられる磚や、窯道具が採集されていることである。同遺跡は近世の米原焼の窯跡と伝えられているが、窯体は確認されていなかった。しかし、これらの遺物より確実に窯の存在が認められたといえよう。

調査参加者

中川和哉、北村圭弘
細川英雄、池田潤実、古澤寛治、坂浩一、福井薫、田中慶希、矢野勝朗、岩根達雄
草彌祥貴、宮川哲郎、井関敏、小林正伸、澤嘉樹
川森茂子

V．三大寺廃寺出土瓦の胎土分析

三辻　利一・北村　圭弘

1　は　じ　め　に

胎土分析によって得られる化学特性は素材粘土の化学特性であるという点では瓦も須恵器と同じである。瓦の場合は須恵器と違って生産地である窯跡が余り残っていない点が産地推定の障害となっている。しかし、瓦には工具の痕跡がはっきりと残っている場合が多いため、型式設定がし易いという利点もあり、産地推定というよりも、むしろ、型式分類された結果に胎土分析がどのように対応するかという観点から分析データは整理される。

本項では三大寺廃寺基壇跡から出土した瓦の胎土分析の結果について述べる。(三辻)

2　出土瓦の型式分類

消費遺跡出土の瓦には、通常、複数の瓦工（集団）による、複数の産地の製品が含まれている可能性を想定しなければならない。そのため、三大寺廃寺出土の瓦についても、工具の痕跡に最大のポイントをおいた型式分類をおこなった。その理由は、特定の工具は基本的に、特定の工房内（の特定の瓦工？）でのみ使用されていたと想定されることから、瓦工が工具を携えて、工房を他所へ移さないかぎり、同じ工具でつくられた製品は胎土も同質（産地が同じ）と考えられるからである。以下に、各型式の概要を記す。

軒　　丸　　瓦（図1）

軒丸瓦は、瓦当文様の系譜と、瓦笵の原体識別を中心として、3系譜4型式に分類された。瓦当文様は、いずれも、周縁に重圏文をめぐらせる蓮華文であるが、A・B類は単弁、C類は複弁で、A類とB類は、蓮弁を輪郭線で表現するか否かという点で大きく異なる。瓦笵の原体識別から、それぞれ、1型式、2型式、1型式に分類された。出土の量比は、A類が最も多く、全体の9割以上を占め、B類とC類は、ごく少量しか確認されない。

軒　　平　　瓦（図2）

軒平瓦は、無顎式の4重弧文のみが出土しているが、叩きしめの技術系譜と叩き板の原体識別を中心として、少なくとも、3系譜5型式に分類された。

AⅠ類は、「1次叩き（縄目）→消去→2次叩き（広端付近のみ）」という叩きしめの工程をたどるもので、2次叩きの原体識別から、3型式が確認された。AⅡ類は、叩きしめの痕跡を残さないもので、AⅠ類の亜類とも考えられる。1型式のみ確認。B類は、端縁に平行する平行状叩きが、わずかに残るもので、同じく1型式のみが確認された。

出土の量比は、AⅠ類が最も多く、大多数を占め、AⅡ類とB類は、極めて少ない。

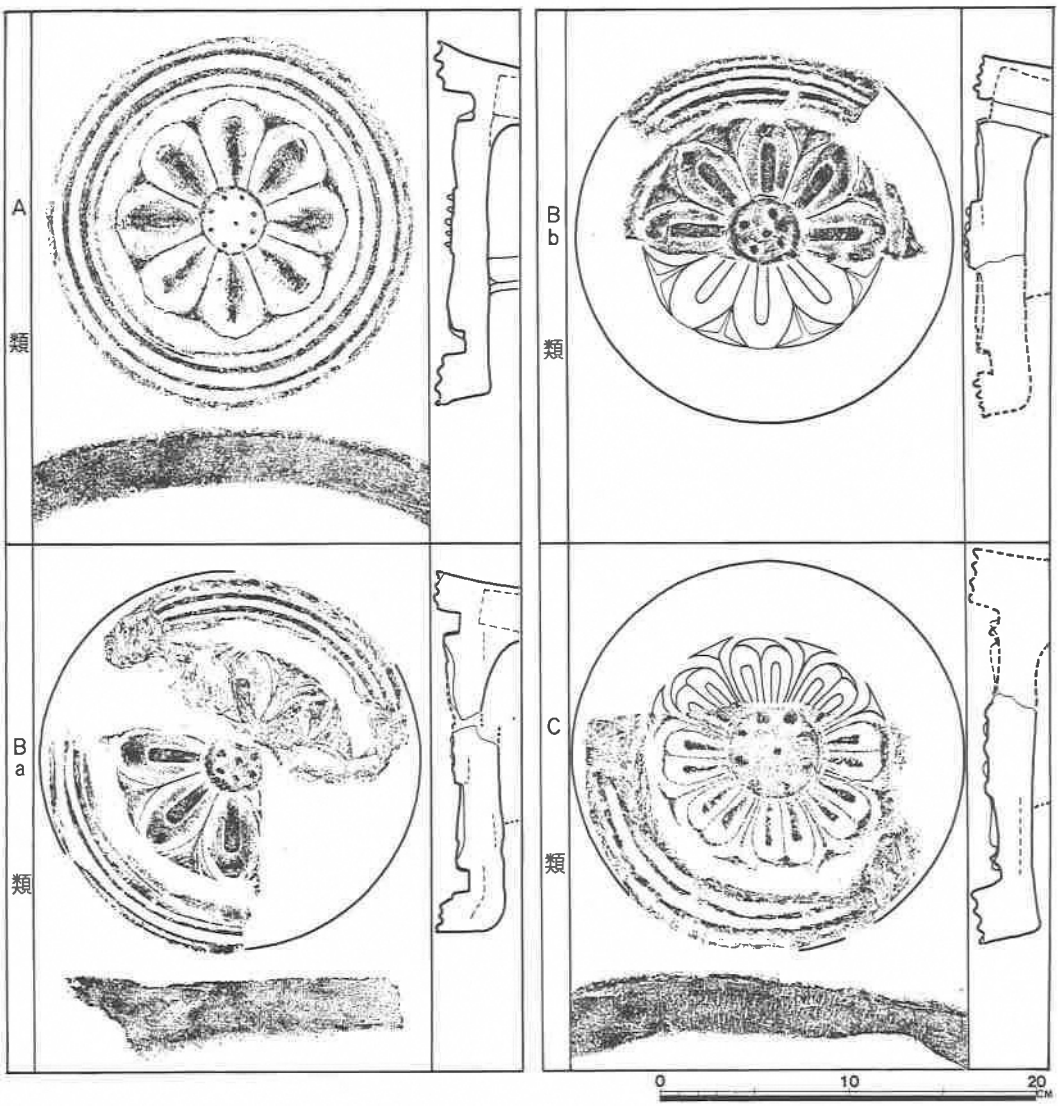


図１　基壇跡出土の軒丸瓦（S＝¼）

平　　瓦（図３、４）

平瓦は、E類を除き、すべてが粘土板桶巻き作りによるものとみられるが、これらも、軒平瓦同様、叩きしめの技術系譜と、叩き板の原体識別を中心として、６系譜20型式に分類された。

ＡＩ類は、軒平瓦ＡＩ類と同じ叩きしめの工程を有すもので、２次叩きの原体識別から、８型式が確認される。ＡII類は、縄目の叩きを消去するだけのもので、軒平瓦ＡII類と同様、２次叩きを省略したＡＩ類の亜類とも考えられる。消去の方法により、少なくとも２型式に細分される。このＡＩ類とＡII類の出土量が、最も多い。

Ｂ類は、極めてまばらな叩きしめをおこなうもので、叩き板の原体には、３個が確認される。しかし、Bb類には、技術的に顕著な相違を示す２型式が認められる。Ｂ類の出土量は、さほど多

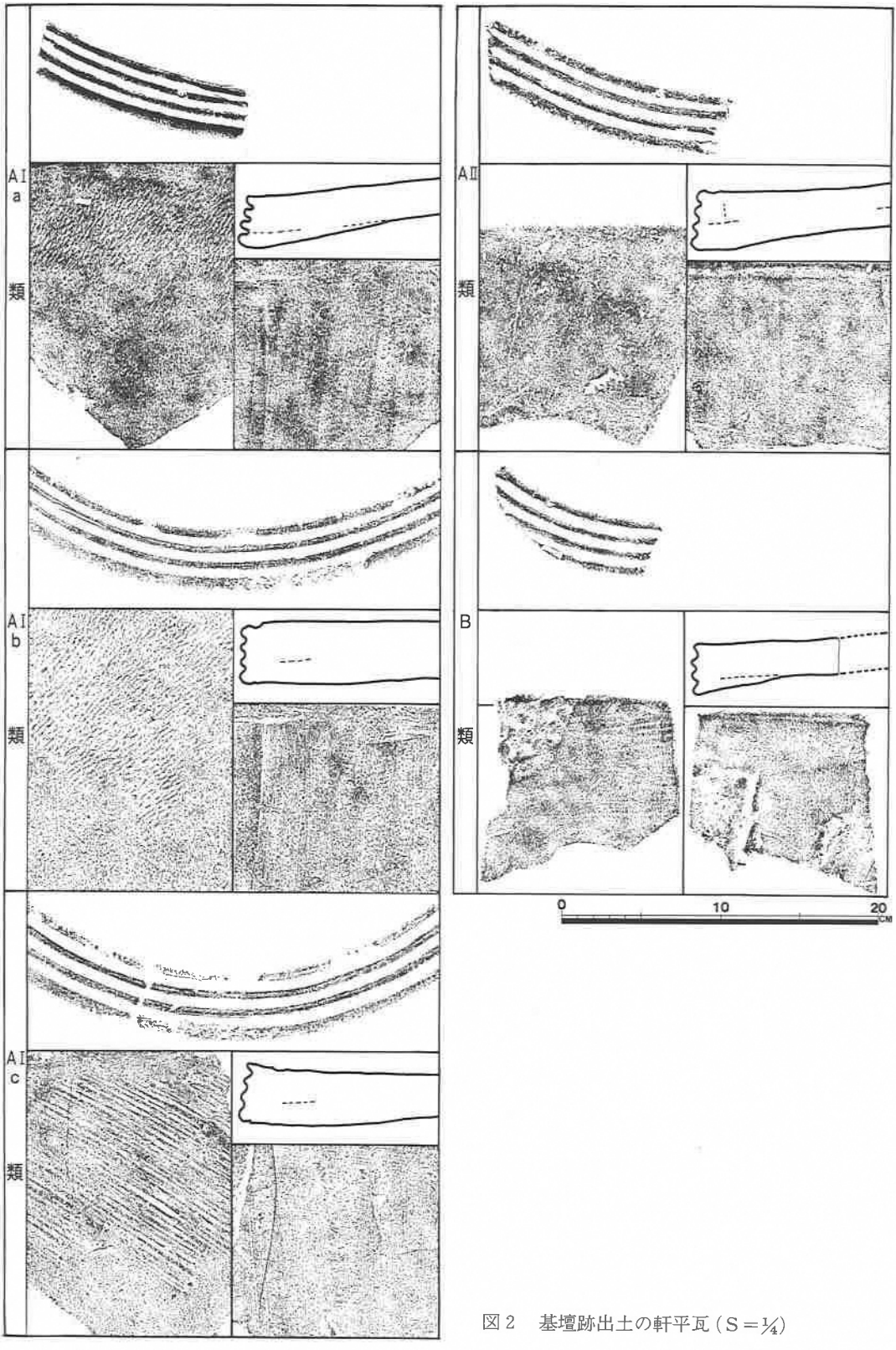


図２　基壇跡出土の軒平瓦（S＝¼）

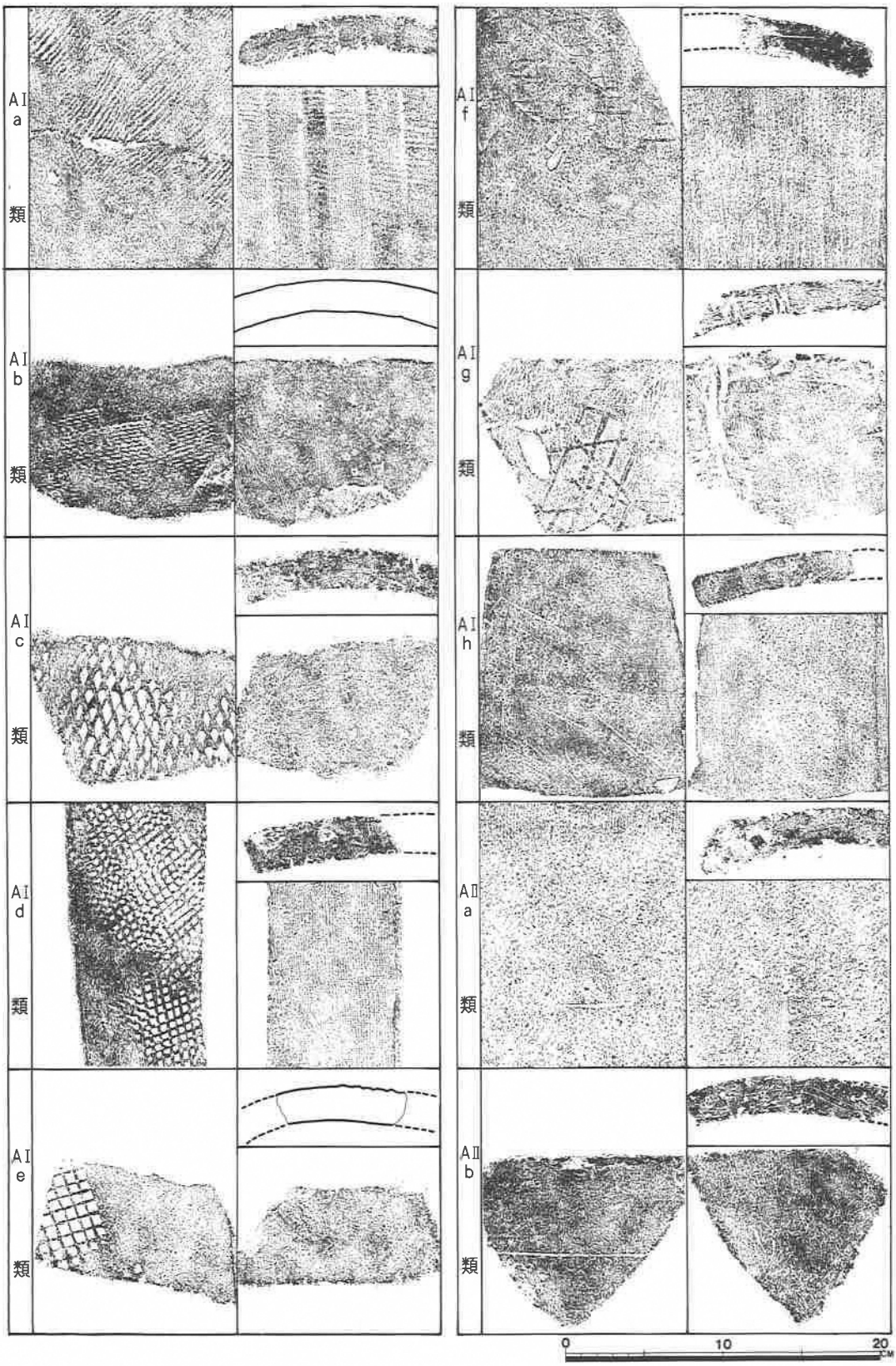


図3　基壇跡出土の平瓦(1)(S＝¼)

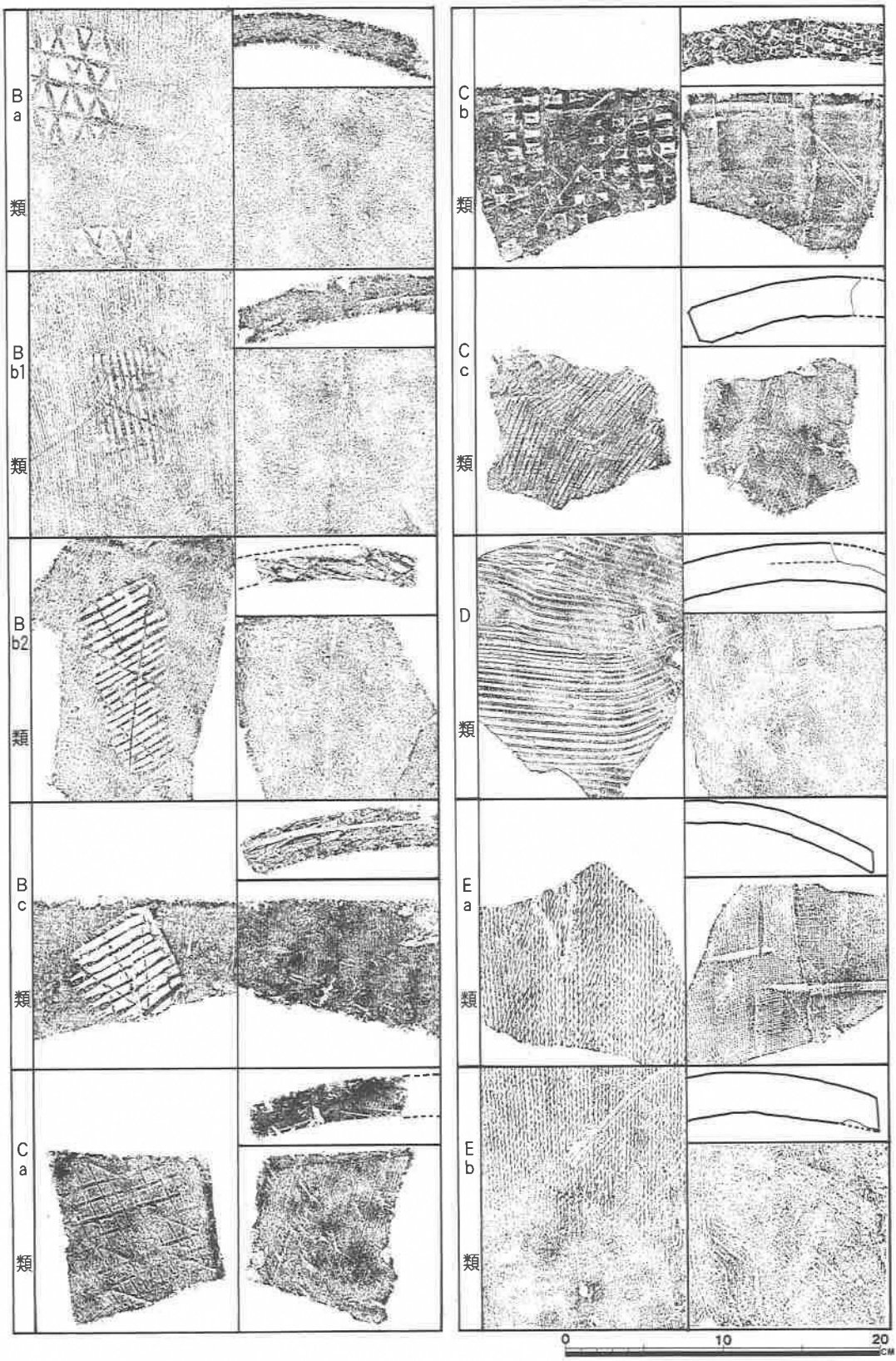


図4　基壇跡出土の平瓦(2)(S＝¼)

くない。

C類は、極めて密な叩きしめをおこなうもので、叩き板の原体識別からは、3型式が認められる。本類の出土量は、極めて少ない。

D類は、叩きしめの痕跡が全く確認されず、単に、ハケ目のみを施ものである。出土量は、極めて少ない。

E類は、他類と異なり、長大な縦位の縄目叩きや、側縁の断面形態などに、一枚作り的な要素の目立つものである。叩き板の原体識別からは、少なくとも2型式が認められる。出土量は、極めて少ない。

丸　　瓦（図5）

丸瓦は、確認されるすべてのものが、行基葺式であった。しかし、叩き板等の痕跡を残すものは、極めて少ないため、代表的なものについてのみ記す。

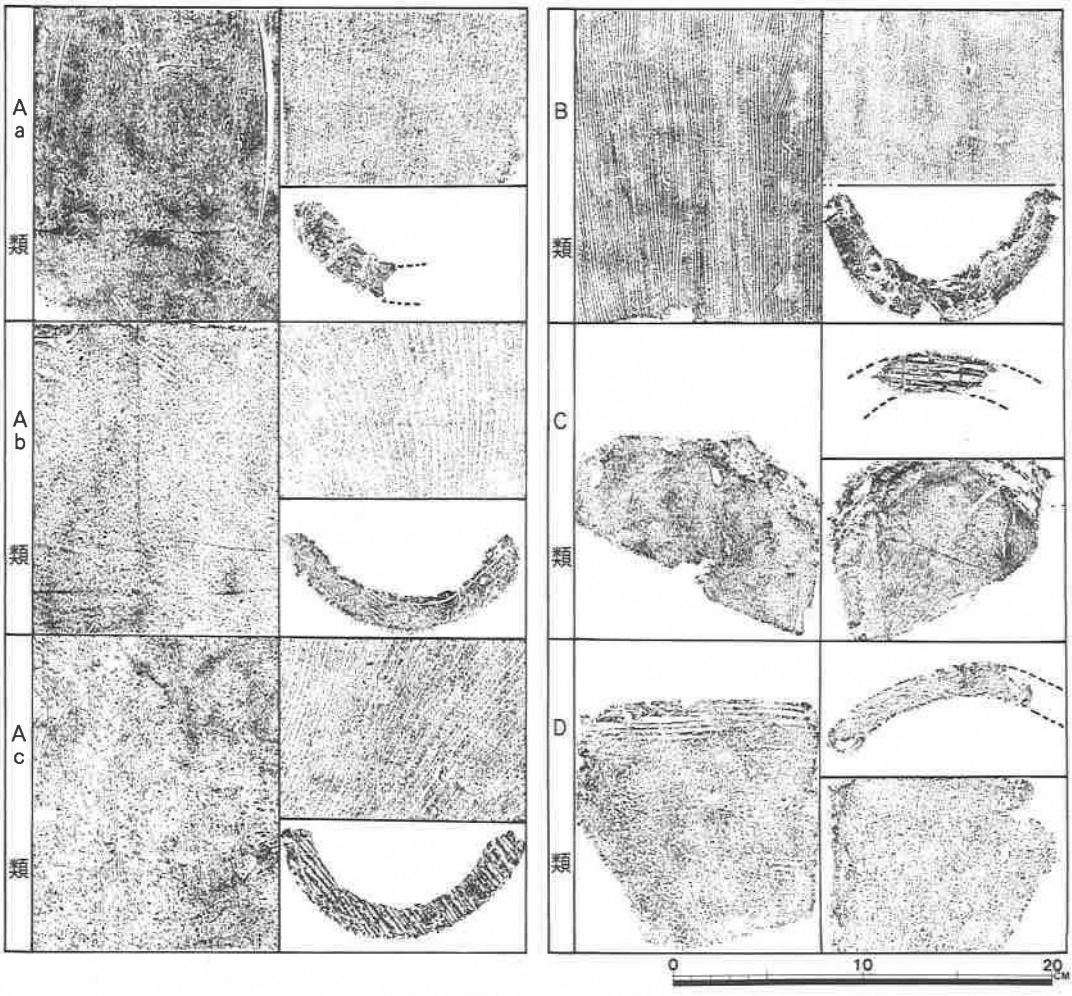


図5　基壇跡出土の丸瓦（S＝¼）

A類は、軒丸瓦A類に伴うことが確認されたもので、細部の特徴から、少なくとも3型式に分類される。それぞれの代表的な特徴は、Aa類・凸面縄目叩き消去、Ab類・凸面平行状叩き、Ac類・狭端面平行叩きである。

B・C・D類については、伴う瓦当部は、未確認であるが、それぞれの、B類・凸面縦位ハケ目、C類・広端面平行叩き、D類・凸面平行叩きという特徴等から3型式に分類された。

以上、不充分な点も多いが、各型式の概要を記した。詳細については、図を参照されたい。

なお、出土量比や技術系譜等から、軒丸瓦A類＝軒平瓦AⅠ類（AⅡ類）＝平瓦AⅠ類（AⅡ類）＝丸瓦A類が創建瓦と想定され、出土量が少なく、かつ技術系譜の全く異なる他類瓦は、さしかえ等の補修用の可能性が高い。また、胎土分析の試料の選択にあたっては、出土量の多いものに限らざるを得なかった。あらかじめ了承されたい。（北村）

3 分析結果

試料を粉末にして、エネルギー分散型蛍光X線分析法で分析した結果を表1にまとめてある。分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値で示してある。

図6にはRb-Sr分布図を示す。通常、RbはK、SrはCaと正の相関性をもち、土器の化学特性の地域差をよく表示する。そして、K-Ca分布図よりも見易いという点でRb-Sr分布図の方がよく使用される。三大寺廃寺の瓦の分布領域は大阪層群、古琵琶湖層の粘土が分布する領域であり、これらの瓦の産地は大阪府、京都府、滋賀県内にあることは確実である。

次に、瓦の型式分類に対応させた結果について説明する。

図7には、軒丸瓦A類のRb-Sr分布図を示す。№6、11の2点は少しずれるが、他のものはよくまとまっており、同じ型式の瓦は同一地域で作られたことを示唆する。

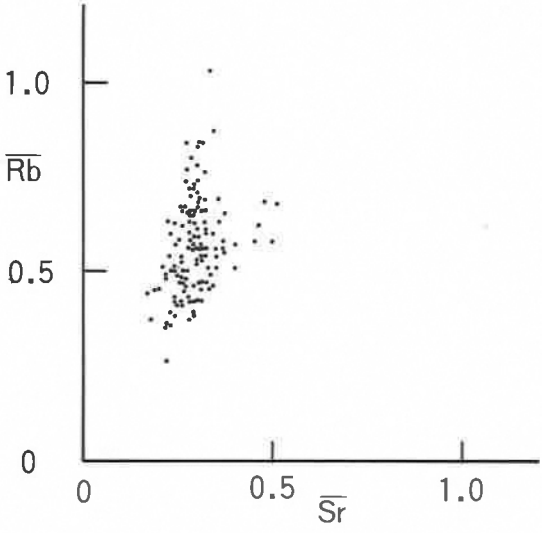


図6　三大寺廃寺出土瓦のRb-Sr分布図

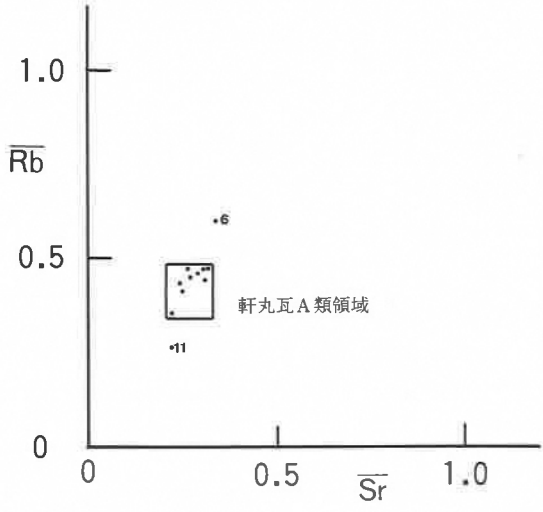


図7　軒丸瓦A類のRb-Sr分布図

図８には軒平瓦ＡＩ類のRb–Sr分布図を示す。ＡＩａとＡＩｂ類の瓦の胎土はほぼ同じであり、これらに対し、ＡＩｃ類の瓦にはSr量がやや多く別胎土である可能性を示唆している。

図９には平瓦ＡＩ類、および、ＡII類のRb–Sr分布図を示す。ＡＩｃ類、ＡＩd類、ＡＩg類の瓦にはSr量がやや多く、他の型式の瓦とは少し胎土は異なる。他のＡＩａ類、ＡＩe類、ＡＩf類、ＡＩｈ類、ＡIIａ、ｂ類の瓦胎土には差異は認められなかった。

図10には、平瓦Ｂ類のRb–Sr分布図を示す。Rb量に大きなばらつきが認められるものの、これらの瓦胎土に差異は認め難い。これらの瓦の胎土はＡＩａ類などと同じとみられる。

図11には、平瓦Ｃ、Ｄ、Ｅ類のRb–Sr分布図を示す。Ｃ、Ｄ類は同質の胎土であり、平瓦ＡＩａ類やＢ類とも同質の胎土とみられる。Ea類はSr量の少ないものと、多いものの２群に分かれ

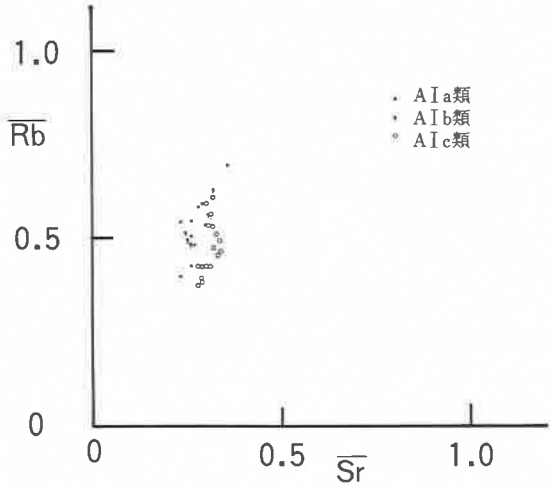


図８　軒平瓦AＩ類のRb-Sr分布図

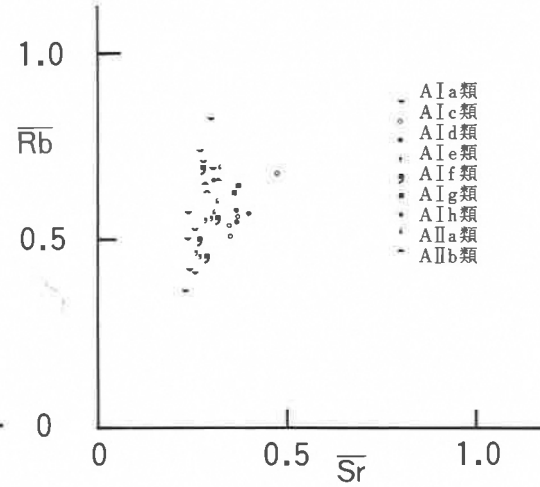


図９　平瓦AＩ類およびAII類のRb-Sr分布図

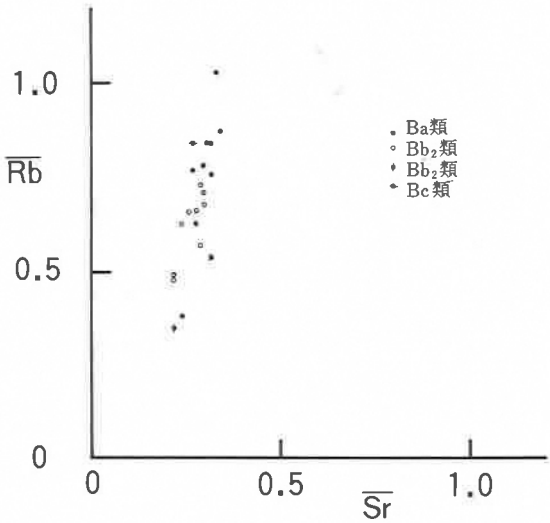


図10　平瓦Ｂ類のRb-Sr分布図

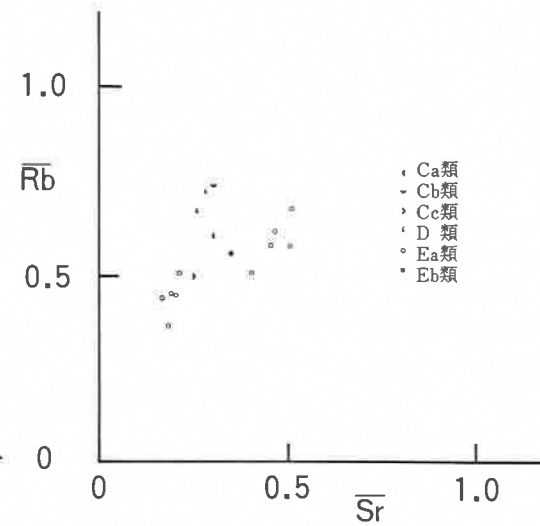


図11　平瓦Ｃ類・Ｄ類およびＥ類のRb-Sr分布図

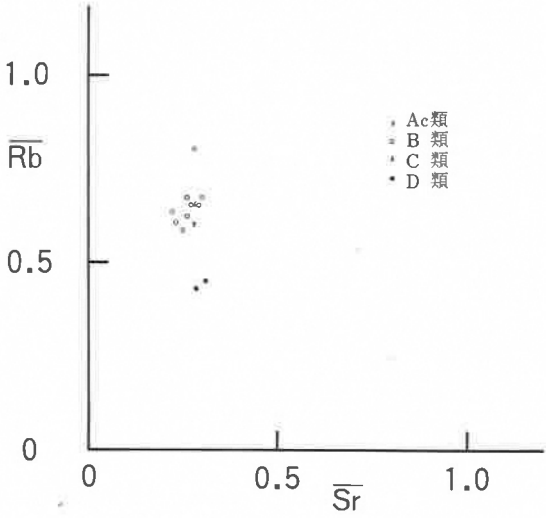


図12　丸瓦のRb-Sr分布図

た。異なる粘土で同一型式の瓦を作っていたと推定される。Eb類の1点の瓦はEa類のうち、Sr量の多い方のグループと同質の胎土をもつとみられる。これらと同じ胎土をもつ他の型式をもつ瓦は今日検出されなかった。

図12には、丸瓦の Rb–Sr 分布図を示す。D類の胎土は若干異なるが、A、B、C類は同じ胎土とみられる。これらはまた、平瓦AⅠa類、B類、C類、D類と同質の胎土をもつとみられる。

以上にみられるように、型式分類にしたがって、若干、胎土は異なっているようであり、同一地域内の複数の場所で作っていた可能性があることを示唆した。(三辻)

追　記

本資料を調査する機会を与えて頂いた米原町教育委員会、滋賀県埋蔵文化財センターの各位、㈶滋賀県文化財保護協会田中勝弘氏に感謝の意を表したい。

表1　三大寺廃寺出土瓦の蛍光X線分析試料の観察表とデータ

(焼成の○は酸化、●は還元、◑は同一個体に両方あるもの、もしくは中間色)

報告番号	種別	型式	色調	焼成		備考	K	Ca	Fe	Rb	Sr
1	軒丸瓦	A	褐色	あまい	○	瓦当部裏面	0.497	0.162	1.98	0.471	0.310
2	〃	〃	青灰色	〃	●	接続丸瓦部(No.3と同一個体)	0.495	0.140	1.99	0.558	0.291
3	〃	〃	〃	〃	●	瓦当周縁部(No.2と同一個体)	0.472	0.150	1.97	0.540	0.312
4	〃	〃	灰褐色	〃	◑	瓦当周縁部	0.426	0.135	2.88	0.352	0.218
5	〃	〃	〃	〃	◑	瓦当周縁部＋間弁部	0.464	0.153	2.24	0.452	0.268
6	〃	〃	青灰色	堅緻	●	瓦当周縁部	0.548	0.186	2.05	0.598	0.338
7	〃	〃	表面 褐色 内部 橙色	あまい	◑	瓦当花弁部＋間弁部	0.436	0.131	2.27	0.426	0.236
8	〃	〃	表面 褐色 内部 青灰色	〃	◑	瓦当花弁部＋中房部	0.452	0.139	2.75	0.412	0.248
9	〃	〃	青灰褐色	ややあまい	◑	瓦当部裏面	0.455	0.147	1.92	0.473	0.265
10	〃	〃	〃	〃	◑	瓦当花弁部＋間弁部＋間弁部	0.493	0.159	1.81	0.472	0.309
11	〃	〃	〃	〃	◑	瓦当周縁部	0.387	0.135	2.87	0.264	0.221
12	軒平瓦	AIa	灰色	ややあまい	●		0.452	0.122	1.83	0.536	0.257
13	〃	〃	青灰色	堅緻	●		0.414	0.121	2.07	0.543	0.233
14	〃	〃	〃	〃	●		0.471	0.154	2.22	0.575	0.280
15	〃	〃	〃	〃	●		0.605	0.236	1.72	0.689	0.355
16	〃	〃	〃	ややあまい	●		0.439	0.150	2.64	0.424	0.278
17	〃	〃	橙色	〃	○		0.433	0.152	2.59	0.385	0.232
18	〃	〃	青灰色	堅緻	●		0.464	0.167	2.52	0.500	0.256
19	〃	〃	〃	〃	●		0.419	0.154	2.02	0.527	0.295
20	〃	〃	〃	〃	●		0.439	0.147	1.96	0.482	0.267
21	〃	〃	〃	〃	●		0.492	0.173	1.55	0.591	0.294
22	〃	AIb	〃	〃	●		0.541	0.177	1.48	0.559	0.307

報告番号	種別	型式	色調	焼成		備考	K	Ca	Fe	Rb	Sr
23	軒平瓦	AIb	青灰色	堅緻	●		0.504	0.160	2.24	0.477	0.256
24	〃	〃	〃	〃	●		0.540	0.155	2.12	0.507	0.238
25	〃	〃	〃	ややあまい	●		0.521	0.145	1.84	0.490	0.251
26	〃	〃	〃	堅緻	●		0.609	0.199	1.89	0.627	0.320
27	〃	AIc	褐色	ややあまい	○	平瓦部	0.471	0.151	2.10	0.489	0.336
28	〃	〃	青灰色	堅緻	●	平瓦部＋瓦当付加部	0.495	0.155	1.97	0.589	0.304
29	〃	〃	〃	〃	●	平瓦部(No.30と同一個体)	0.501	0.146	1.90	0.561	0.314
30	〃	〃	〃	〃	●	瓦当付加部(No.29と同一個体)	0.507	0.159	1.99	0.611	0.320
31	〃	〃	褐色	〃	○	平瓦部＋瓦当付加部	0.455	0.145	2.02	0.528	0.297
32	〃	〃	青灰色	〃	●	平瓦部(No.33と同一個体)	0.450	0.156	2.03	0.506	0.329
33	〃	〃	〃	〃	●	瓦当付加部(No.32と同一個体)	0.464	0.133	1.88	0.534	0.314
34	〃	〃	〃	ややあまい	●	平瓦部(No.35と同一個体	0.462	0.147	1.98	0.467	0.317
35	〃	〃	青〃	〃	●	瓦当付加部(No.34と同一個体)	0.467	0.149	1.90	0.462	0.336
36	〃	〃	褐色	〃	○	平瓦部(No.37と同一個体)	0.429	0.139	1.99	0.449	0.330
37	〃	〃	〃	〃	○	瓦当付加部(No.36と同一個体)	0.433	0.132	1.89	0.418	0.292
38	〃	〃	青褐灰色	〃	◑	平瓦部(No.39と同一個体)	0.393	0.127	1.82	0.417	0.297
39	〃	〃	〃	〃	◑	瓦当付加部(No.38と同一個体)	0.415	0.134	2.00	0.418	0.263
40	〃	〃	褐色	〃	○	平瓦部(No.41と同一個体)	0.404	0.134	1.97	0.380	0.293
41	〃	〃	〃	〃	○	瓦当付加部(No.40と同一個体)	0.428	0.130	2.13	0.382	0.292
42	〃	〃	〃	〃	○	平瓦部(No.43と同一個体)	0.393	0.146	2.30	0.370	0.277
43	〃	〃	〃	〃	○	瓦当付加部(No.42と同一個体)	0.445	0.131	2.13	0.420	0.312
44	平瓦	AIa	褐灰黒色	堅緻	◑	表面が燻し焼き風に焼ける。 ※平瓦　C類、E類、F類以外の平瓦の一部が混入している可能性あり	0.524	0.249	1.65	0.691	0.305
45	〃	〃	表面　灰黒色 内部　褐色	〃	◑		0.575	0.228	1.59	0.711	0.279
46	〃	〃	〃	ややあまい	◑		0.610	0.216	1.66	0.883	0.301
47	〃	〃	〃	〃	◑		0.541	0.170	2.03	0.566	0.237
48	〃	〃	褐色 一部　灰黒色	〃	◑		0.617	0.140	1.52	0.740	0.272
49	〃	〃	橙褐色 一部　灰黒色	〃	◑		0.487	0.130	2.22	0.415	0.239
50	〃	〃	〃	〃	◑		0.499	0.153	2.04	0.525	0.257
51	〃	〃	〃	〃	◑		0.482	0.170	2.08	0.500	0.238
52	〃	〃	灰黒色 一部　褐色	〃	◑		0.419	0.124	2.19	0.355	0.227
53	〃	〃	〃	〃	◑		0.428	0.174	2.08	0.408	0.258
54	〃	AIc	褐色	〃	○		0.489	0.153	1.73	0.513	0.351
55	〃	〃	〃	〃	○		0.496	0.152	1.82	0.564	0.369
56	〃	〃	〃	〃	○		0.632	0.247	1.75	0.680	0.475
57	〃	〃	〃	〃	○		0.442	0.132	1.65	0.540	0.350
58	〃	AId	青灰褐色	〃	◑		0.458	0.158	1.73	0.545	0.367
59	〃	〃	青灰色 一部　褐色	堅緻	◑		0.468	0.162	1.73	0.576	0.370
60	〃	〃	灰黒色	あまい	●		0.535	0.204	1.83	0.570	0.400
61	〃	AIe	青灰褐色	〃	◑		0.475	0.148	1.32	0.555	0.285
62	〃	〃	青灰色	ややあまい	●		0.481	0.141	1.34	0.564	0.302
63	〃	〃	褐色	〃	○		0.425	0.136	1.04	0.465	0.256
64	〃	〃	〃	〃	○		0.412	0.161	1.27	0.464	0.274
65	〃	AIf	青灰色 一部　褐色	堅緻	◑		0.415	0.135	1.89	0.461	0.294
66	〃	〃	青灰色	〃	●		0.423	0.157	2.04	0.499	0.273
67	〃	〃	〃	〃	●		0.501	0.176	2.04	0.560	0.317
68	〃	〃	灰褐色	あまい	◑		0.502	0.262	1.93	0.699	0.278
69	〃	AIg	灰褐色	ややあまい	○		0.473	0.160	2.29	0.625	0.360
70	〃	〃	〃	〃	○		0.491	0.167	2.20	0.650	0.368
71	〃	AIh	青灰色	堅緻	●		0.507	0.161	1.63	0.655	0.310
72	〃	AIIa	〃	〃	●	※平瓦、C類、E類、F類以外の平瓦の一部が混入している可能性あり	0.571	0.177	1.48	0.685	0.318
73	〃	〃	〃	〃	●		0.492	0.182	1.96	0.572	0.306
74	〃	〃	〃	〃	●		0.499	0.172	1.83	0.603	0.324
75	〃	AIIb	〃	〃	●		0.457	0.283	1.96	0.626	0.293

報告番号	種別	型式	色調	焼成		備考	K	Ca	Fe	Rb	Sr
76	平瓦	AⅡb	青灰色	堅緻	●		0.600	0.163	1.75	0.646	0.292
77	〃	〃	〃	〃	●		0.521	0.169	1.56	0.658	0.320
78	〃	Ba	〃	〃	●		0.537	0.175	1.29	0.755	0.322
79	〃	〃	〃	〃	●		0.539	0.164	1.26	0.772	0.271
80	〃	〃	〃	〃	●		0.541	0.180	1.27	0.784	0.303
81	〃	〃	表面 褐色 内部 灰黒色	ややあまい	◑		0.412	0.141	1.50	0.375	0.242
82	〃	〃	青灰色	堅緻	●	青灰色、堅緻に焼けるものは表面に黒色粒が浮く	0.622	0.189	1.28	0.844	0.307
83	〃	〃	表面 褐色 内部 灰黒色	ややあまい	◑		0.552	0.348	1.62	0.535	0.315
84	〃	〃	褐色	〃	○		0.481	0.139	1.44	0.634	0.277
85	〃	〃	青灰色	堅緻	●		0.594	0.175	1.40	0.838	0.306
86	〃	〃	〃	〃	●		0.597	0.180	1.40	0.870	0.342
87	〃	〃	青灰色 一部 灰黒色	〃	●		0.585	0.301	1.44	1.03	0.327
88	〃	Bb_1	褐色	ややあまい	○		0.514	0.143	1.56	0.680	0.297
89	〃	〃	褐色 内部 灰黒色	〃	○		0.523	0.141	2.08	0.482	0.221
90	〃	〃	〃	〃	○		0.521	0.127	1.46	0.658	0.283
91	〃	〃	青灰色	堅緻	●		0.547	0.145	1.44	0.730	0.286
92	〃	〃	褐色	ややあまい	○	ほとんどのものが酸化炎焼成で還元されても淡い青灰色にしか焼けない。	0.477	0.143	1.42	0.573	0.285
93	〃	〃	〃	〃	○		0.459	0.126	1.32	0.634	0.241
94	〃	〃	〃	〃	○		0.490	0.134	1.38	0.656	0.261
95	〃	〃	〃	〃	○		0.476	0.242	3.25	0.486	0.222
96	〃	〃	青灰色	〃	◑		0.549	0.189	1.57	0.708	0.295
97	〃	Bb_2	表面 褐色 内部 灰黒色	〃	◑		0.427	0.129	2.65	0.348	0.219
98	〃	Bc	表面 灰褐色 内部 灰黒色	〃	◑		0.593	0.207	1.92	0.839	0.270
99	〃	Ea	青灰色	堅緻	●		0.440	0.133	3.19	0.506	0.206
100	〃	〃	橙色 一部 青灰色	〃	◑		0.464	0.222	1.63	0.581	0.447
101	〃	〃	青灰色	〃	●		0.541	0.215	2.02	0.679	0.513
102	〃	〃	灰褐色	あまい	◑		0.395	0.138	3.14	0.370	0.177
103	〃	〃	青灰色	堅緻	●	※平瓦C類、E類、F類以外の平瓦の一部が混入している可能性あり	0.535	0.211	2.14	0.623	0.458
104	〃	〃	〃	〃	●		0.403	0.130	2.44	0.451	0.186
105	〃	〃	〃	〃	●		0.411	0.085	3.38	0.440	0.165
106	〃	〃	〃	〃	●		0.405	0.124	2.31	0.446	0.203
107	〃	〃	〃	〃	●		0.425	0.203	1.46	0.509	0.401
108	〃	〃	〃	〃	●		0.461	0.186	1.59	0.577	0.503
109	〃	Eb	灰褐色 一部 青灰色	あまい	◑		0.571	0.290	1.67	0.556	0.354
110	〃	Ca	褐色	堅緻	◑		0.508	0.186	1.80	0.606	0.304
111	〃	Cb	〃	〃	○		0.633	0.233	1.71	0.737	0.304
112	〃	Cc	灰青色	〃	●		0.384	0.119	2.06	0.501	0.238
113	〃	D	青灰色	〃	●		0.486	0.158	1.55	0.722	0.281
114	〃	D	〃	〃	●		0.458	0.137	1.64	0.668	0.255
115	丸瓦	Ac	青灰褐色	あまい	◑		0.488	0.148	2.13	0.599	0.278
116	〃	D	褐色	〃	○	酸化炎焼成のもののみ確認	0.431	0.155	2.05	0.447	0.306
117	〃	〃	〃	〃	○		0.415	0.148	2.00	0.434	0.283
118	〃	C	表面 褐灰色 内部 黒灰色	〃	◑		0.575	0.250	1.69	0.647	0.275
119	〃	〃	灰褐色	堅緻	◑		0.511	0.140	1.28	0.669	0.260
120	〃	〃	〃	〃	◑		0.502	0.151	1.39	0.649	0.282
121	〃	〃	青灰褐色	〃	●		0.502	0.155	1.32	0.654	0.290
122	〃	〃	褐色	ややあまい	○	ほとんどのものが酸化炎焼成で還元されても淡い青灰色にしか焼けない	0.464	0.120	1.33	0.627	0.224
123	〃	〃	表面 褐色 内部 黒灰色	〃	◑		0.602	0.274	1.35	0.666	0.295
124	〃	〃	褐色	〃	○		0.437	0.129	1.59	0.599	0.233
125	〃	〃	〃	〃	○		0.598	0.149	1.63	0.583	0.253
126	〃	〃	表面 褐色 内部 灰黒色	〃	◑		0.629	0.170	1.50	0.624	0.263
127	〃	〃	〃	〃	◑		0.604	0.220	1.86	0.800	0.278

※北村が資料の選択、観察を、三辻が分析をおこなった。なお資料については再観察を可能にするため、母材のすべてを残している。

VI. 付　　表

付表１　米原町埋蔵文化財関係文献一覧表

付表２　米原町遺跡一覧表

付表１　米原町埋蔵文化財関係文献一覧表

番号	文　　献
	明治 43 年（1910）
1	中 川 泉 三 「近江國醒ヶ井村に発見せる神籠石様の列石」（『歴史地理』第 16 巻第 3 号）
2	中川泉三他 「近江國醒ヶ井に於ける神籠石に類せる遺跡」（『考古学雑誌』第 1 巻第 2 号）
	明治 44 年（1911）
3	藤井甚太郎 「近江國醒ヶ井村神籠石様の列石につきて」（『歴史地理』第 17 巻第 3 号）
	大正 2 年（1913）
4	滋賀県坂田郡役所編『近江坂田郡志』
	大正 7 年（1918）
5	島 田 貞 彦 「近江國坂田郡の二古墳に就て」（『考古学雑誌』第 9 巻第 4 号）
	昭和 16 年（1941）
6	滋賀県坂田郡教育会編『改訂近江國坂田郡志』
	昭和 32 年（1957）
7	梅 原 末 治 「珍しい鹿角器」（『考古学雑誌』第 42 巻第 3 号）
	昭和 33 年（1958）
8	小 江 慶 雄 「琵琶湖湖底遺跡再考」（『京都学芸大学学報』ser. A：No.13）
	昭和 35 年（1960）
9	佐　原　真 「第二編上代第一章先史時代」（『彦根市史』上冊）
	昭和 36 年（1961）
10	西　田　弘 「石淵山古墳群発掘調査報告」（『滋賀県史蹟調査報告』第 12 冊　滋賀県教育委員会）
	昭和 48 年（1973）
11	小島正夫他 「矢倉・磯崎両遺跡について」（『近江郷土史研究』第 1 巻第 3 号）
12	近江郷土史研究編集部「入江干拓地の遺跡と鹿角製戈」（『近江郷土史研究』第 1 巻第 3 号）
	昭和 52 年（1977）
13	田 中 勝 弘 『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会、㈶滋賀県文化財保護協会
14	西　田　弘 「近江の古瓦II　湖西・湖北」（『文化財教室シリーズ』18　㈶滋賀県文化財保護協会）
	昭和 55 年（1980）
15	海津栄太郎 「醒ヶ井列石遺構」（『夢ふくらむ幻の高安城』第 5 集　高安城を探る会）
16	猪熊兼勝他 『日本古代の鴟尾』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
17	田 中 勝 弘 「III坂田郡米原町塚原古墳」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』VIII－２　滋賀県教育委員会、㈶滋賀県文化財保護協会）
18	田 中 勝 弘 「IV坂田郡米原町三大寺遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』VIII－２　滋賀県教育委員会、㈶滋賀県文化財保護協会）
	昭和 56 年（1981）
19	西　田　弘 「滋賀県下の古墳出土鏡について(3)」（『滋賀文化財だより』No.53　㈶滋賀県文化財保護協会）
	昭和 57 年（1982）
20	佐 藤 宗 男 「米原町西町出土の須恵器」（『滋賀文化財だより』No.63　㈶滋賀県文化財保護協会）
	昭和 58 年（1983）
21	坪 之 内 徹 「畿内周辺地域の藤原宮式軒瓦－讃岐、近江を中心として－」（『考古学雑誌』第 68 巻第 1 号）

番号	文　　献
	昭和59年（1984）
22	田中勝弘　『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　三大寺遺跡群－坂田郡米原町大字枝折所在―』米原町教育委員会
23	中井均　『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　磯山城遺跡－発掘調査速報－』米原町教育委員会
24	長谷川銀蔵・博美　「近江（滋賀）にも石造の山城があった！向山の列石遺構」（『滋賀県中世城郭分布調査』2　滋賀県教育委員会、㈶滋賀総合研究所
	昭和60年（1985）
25	中井均　『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　筑摩湖岸・磯湖岸遺跡試掘調査報告書』米原町教育委員会
26	横山卓雄　「滋賀県磯山城遺跡の粘土中の火山ガラスの屈折率測定」（『九十九地学』第20号　京都大学教養部）
27	春成秀爾　「鉤と霊」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集）
28	吉田秀則他　「Ⅰ坂田郡米原町法善寺遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅻ－7　滋賀県教育委員会、㈶滋賀県文化財保護協会）
	昭和61年（1986）
29	中井均　「31．滋賀県磯山城遺跡」（『日本考古学年報』37　日本考古学協会）
30	中井均他　『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　磯山城遺跡－琵琶湖辺縄文早期～晩期遺跡の調査』米原町教育委員会
31	中井均　『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅴ　筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書』　米原町教育委員会
32	田中勝弘　「入江内湖遺跡とその遺物」（『滋賀県考古学論叢』3　滋賀考古学論叢刊行会）
33	中井均　「醒井神籠石雑考」（『滋賀考古学論叢』3　滋賀考古学論叢刊行会）
34	中井均　「入江内湖周辺遺跡出土木製品の概要」（『古代学研究』第111号　古代学研究会）
35	海津栄太郎　『醒ヶ井列石遺構』（『城』No.121　関西城郭研究会）
36	中井均　「鎌刃城について－特にその構造と水手を中心に－」（『近江の城』第19号　㈶滋賀総合研究所）
	昭和62年（1987）
37	中井均　『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅵ　入江内湖遺跡発掘調査報告書－米原町立米原小学校新築に伴う発掘調査－』　米原町教育委員会
38	中井均　『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅶ　ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』米原町教育委員会
39	海津栄太郎　『醒ヶ井列石遺構　補遺・論考と参考文献』（『城』No.124　関西城郭研究会）
40	中川和哉　「琵琶湖東部の縄文時代における石材－磯山城遺跡を中心に－」（『同志社大学考古学シリーズⅢ考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会）

付表2　米原町遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地 大字	所在地 小字	種類	時代	立地	遺跡の概要	遺物	地目	備考	文献
1	朝妻港跡遺跡	朝妻筑摩	川尻	港跡	奈良～中世	湖岸、湖底		灰釉、須恵器	湖		
2	朝妻遺跡	朝妻筑摩	上中瀬、石塔	散布地	中世	平地		灰釉、陶器	社地、畑地		
3	朝妻城跡	朝妻筑摩	向蔵	城跡	中世	平地	堀の痕跡有り		社地、畑地	新庄氏の居城	28
4	法善寺遺跡	朝妻筑摩	筑摩	寺院跡		平地			寺地、宅地		28
5	今江寺遺跡	朝妻筑摩	南畑	寺院跡	古代～中世	平地		土師器	墓地、畑地	筑摩神社の神宮寺	
6	筑摩御厨跡遺跡	朝妻筑摩	川南	官衙	奈良～平安	平地	奈良～平安の包含層	須恵器、緑釉、鉄器	畑地	昭和60年発掘調査	25、31
7	筑摩湖岸遺跡	朝妻筑摩	川南	散布地	古代～中世	湖岸、湖底		須恵器、灰釉	湖		
8	入江小学校前湖岸遺跡	磯	男鳥川	散布地	弥生～中世	湖岸、湖底	Ⅳ章参照	石槍、須恵器	湖		
9	磯湖底遺跡	磯		集落跡	縄文	湖底	縄文時代後、晩期の包含層	縄文土器	湖	昭和60年試掘	
10	磯湖岸遺跡	磯	内屋敷、南川	散布地	弥生～古墳	湖岸、湖底		須恵器、土師器	湖		
11	磯崎古墳群	磯	ホトビ	古墳群	古墳	丘陵	Ⅲ章参照	須恵器、鉄器	山林	消滅	4、6、11
12	磯山城遺跡	磯	日頭	集落跡	縄文～奈良	丘陵、山麓	Ⅲ章参照	縄文早～晩期の土器	山林、畑地	昭和59年発掘調査	23、26、29、30、40
13	磯山城跡	磯	トラカシロ	城跡	中世	山頂	削平地有り		山林	磯野氏の居城	
14	堂谷遺跡	磯	堂前、堂谷	寺院跡	白鳳	山麓	Ⅲ章参照	瓦片、鴟尾	山林、畑地		16
15	袖塚遺跡	磯	袖塚	集落跡	弥生	山麓		石斧	水田		
16	神塚古墳	磯	円山東	古墳	古墳	山頂	マウンド有り		山林		
17	円山西古墳	磯	円山西	古墳	古墳	山麓			山林	消滅	
18	虎ケ城跡	磯	藤脇	城跡	中世	山頂	削平地有り		山林		
19	矢倉川遺跡	磯	松ケ脇	散布地	縄文～平安	川底		縄文早期土器	河川		11
20	埋塚古墳	磯	埋塚	古墳	古墳	平地	マウンド有り		山林		
21	物生山遺跡	磯	埋塚	集落跡	弥生	平地		弥生土器	水田		
22	入江内湖西野遺跡	磯	西野	集落跡	弥生～古墳	平地	掘立柱建物3棟、貯蔵穴	弥生土器、古式土師器	水田		8、9、13
23	福島城跡	梅ケ原	福島	城跡	中世	平地			畑地	米原氏の居館	
24	米原駅西遺跡	梅ケ原	杜若	集落跡	弥生	平地		弥生土器	水田		
25	菖蒲嶽城跡	梅ケ原	奥谷	城跡	中世	山頂	削平地、堀切有り				
26	霊水寺遺跡	梅ケ原	寺屋敷	寺院跡		山麓			寺地、畑地	天平年間、行基創建	
27	善後寺遺跡	梅ケ原	善行寺	寺院跡		山麓	石塔、石仏有り		畑地、墓地		
28	太尾山城跡	米原	太尾	城跡	中世	山頂	Ⅲ章参照		山林	米原氏の居城	
29	三郎谷古墳	米原	三郎谷	古墳	古墳	丘陵	マウンド有り		山林		
30	岩谷遺跡	米原	岩谷	窯跡	近世	山腹		窯壁材、須恵器	山林		
31	米原駅前遺跡	下多良	知前上	集落跡	古墳	平地		須恵器	畑地		20
32	下定使遺跡	下多良	下柳	集落跡	古墳	平地	古墳時代の包含層	土師器、須恵器	水田	昭和61年発掘調査	38
33	中多良入江内湖周辺遺跡	下多良	下定使	集落跡	古代～奈良	平地		万年通宝	水田		
34	中多良遺跡	中多良	大縄	集落跡	弥生	平地		石皿	水田		
35	薗華寺遺跡	中多良	円ケ寺	寺院跡	奈良～中世	平地	Ⅲ章参照	須恵器、瓦	水田	歓喜光寺の子院	38
36	立花遺跡	中多良	立花	集落跡	弥生～奈良	平地	Ⅲ章参照	弥生土器、管玉	水田	昭和62年発掘調査	
37	筑摩佃遺跡	朝妻筑摩	佃	集落跡	縄文～弥生	平地	Ⅲ章参照	縄文早～晩期土器	水田		38
38	本願寺遺跡	上多良	七本柳	寺院跡、集落跡	古墳～中世	平地		古式土師器	水田	昭和62年発掘調査	
39	入江内湖遺跡	磯		集落跡	縄文～平安	平地	Ⅲ章参照	土器、石器、玉類	水田		7、8、9、12、27、32、34、37
40	等倫寺古墳	一色	上野	古墳	古墳	山麓	円墳1基、横穴式石室		寺地		

41	森の谷古墳	醍井	森之谷	古墳	古墳	山麓	円墳1基、横穴式石室	須恵器、人骨	山林	消滅		
42	醍井神籠石様列石	醍井	西出	石墨		山頂	Ⅲ章参照		山林		1、2、3、15、24、33、35、39
43	地蔵堂前遺跡	醍井	本町	散布地	弥生	平地		石斧	宅地		
44	醍井古墓	醍井	片山	墓	中世	丘陵端	Ⅲ章参照	瀬戸三耳壺	山林		
45	片山古墳群	醍井	片山	古墳	古墳	山腹	Ⅲ章参照		山林		5
46	耳谷古墳	枝折	耳谷	古墳	古墳	山腹	円墳1基、横穴式石室		山林		5
47	塚原古墳群	枝折	塚原	古墳	古墳	平地	Ⅲ章参照	須恵器、馬具、玉類	水田	昭和58年発掘調査	17、22
48	三大廃寺	枝折	寺尾	寺院跡	白鳳	平地	Ⅲ章参照	瓦、須恵器	水田	昭和58年発掘調査	14、18、21、22
49	朝倉A遺跡	下丹生	石田森	集落跡	縄文～奈良	平地		石器剥片、凹石	畑地		
50	朝倉B遺跡	下丹生	朝倉	集落跡	縄文～奈良	平地		石器剥片、縄文土器	畑地		
51	朝倉古墳群	下丹生	萩谷	古墳	古墳	山麓	2基以上の石材露出		山林		
52	土肥城跡	枝折	造座	城跡	中世	山頂	削平地、堀切有り		山林	土肥氏の居城	
53	江竜遺跡	下丹生	江竜奥	集落跡	縄文～弥生	山腹	Ⅳ章参照	石斧	山林		
54	下丹生古墳	下丹生	小谷町	古墳	古墳	山麓	Ⅲ章参照		山林		
55	上丹生B遺跡	上丹生	井尻	集落跡	縄文～奈良	平地		石器剥片、須恵器	畑地		
56	法惟坊遺跡	上丹生	石仏	寺院跡	平安	山腹	石塔有り		山林		
57	上丹生A遺跡	上丹生	上出	集落跡	縄文～弥生	山麓		石斧	社地		
58	上丹生C遺跡	上丹生	名古出	集落跡	奈良	平地		須恵器	畑地		
59	狐塚古墳	上丹生	野田	古墳	古墳	山腹	積石塚状のマウンド		山林		
60	樽ケ畑遺跡	樽ケ畑	木ノ口	寺院跡		山腹			山林		
61	松尾寺遺跡	上丹生	松尾山	寺院跡	奈良～中世	山腹	Ⅳ章参照、基壇、坊跡多数	土師器、陶器	山林	役小角創建伝承	
62	石淵山古墳群	河南	石淵山	古墳	古墳	山腹	Ⅲ章参照	鏡、金環、馬具	山林	半壊	5、10、19
63	薬師谷遺跡	三吉	流	寺院跡		山麓			山林		
64	蓮華寺遺跡	番場	椿原	寺院跡	中世	山麓			寺地	聖徳太子創建伝承	
65	番場遺跡	番場	上町屋	集落跡	縄文	山麓	Ⅳ章参照	石棒、石斧	宅地		
66	六波羅山遺跡	番場	不動谷	墓	中世	山腹	石灰岩製五輪塔		山林	伝北条仲時の墓	
67	不動谷瓦窯跡	番場	不動谷	瓦窯跡	白鳳	山腹	Ⅲ章参照	瓦	山林	消滅	14
68	原事袖遺跡	番場	原事神	集落跡	平安～中世	平地		須恵器、白磁	水田		
69	本授寺遺跡	番場	上町	寺院跡		山麓			寺地		
70	堀氏館跡	番場	上町	館跡	中世	山麓	土墨有り		畑地	堀氏の居館	
71	殿屋敷城跡	番場	殿屋敷	城跡	中世	山頂	削平地、堀切有り		山林	城主末詳	
72	今福寺遺跡	番場	今福寺	寺院跡		山麓	石仏、石塔有り		山林		
73	細尾洞窟遺跡	番場	細尾			山腹			山林		
74	鎌刃城跡	番場	平田、永田	城跡	中世	山頂	削平地、堀切、土墨有り		山林	土肥氏、堀氏の居城	36
75	地頭山城跡	三吉	地堂山	城跡	中世	山頂	削平地、堀切有り		山林	堀氏の居城	
76	八坂神社遺跡	三吉	堂ノ山	散布地	縄文～中世	山麓	鎌倉時代九重石塔	凹石	社地		
77	三吉古墳	三吉	下和佐川	古墳	古墳	平地	石棺出土と伝えられる		宅地	消滅	
78	上野館跡	一色	上野	館跡	中世	山麓			畑地		
79	樋口城跡	三吉	鳥居本	城跡	中世	平地			宅地		
80	門根城跡	三吉	谷ノ山	城跡	中世	平地			宅地		
81	平野館跡	梅ケ原	廻り固	館跡	中世	平地			畑地、宅地		
82	ヒジリ山古墳	磯	堅山	古墳	古墳	山頂	マウンド有り		山林		
83	醍井城跡	醍井	岩根谷	城跡	中世	丘陵			山林		

米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅷ

米原町内遺跡分布調査報告書

昭和63年３月25日　印刷
昭和63年３月31日　発行

発行　米原町教育委員会
滋賀県坂田郡米原町下多良３丁目３番地

印刷　有限会社真陽社
京都市下京区油小路通仏光寺上ル
Tel(075)351－6034